スペイン旅行記

内田芳邦

2015
Junio

日本語
BILINGUAL
英語・西語

はじめに

　一昨年、大学以来の友人Ｋ君と箱根で１泊した。そのＫ君から、今年もどうかと打診されたので提案してみた。
「温泉旅行もいいけれど、元気で歩きまわれるうちに海外はどうかな」
お互い68歳のじじいであるが、二人ともその自覚はない。足立区に住むＫ君は、週に一度は荒川の堤防をジョギングしている。私だって、少なくとも週一度はテニスで走りまわっている。
　ヨーロッパへ行こう。フランスはどうかという話になったが、今年１月、イスラム過激派による連続銃撃テロ事件が起きた。イスラム教に対する風刺漫画に反発し、雑誌社を襲撃して１２人を殺害した事件とそれに続いた一連の銃撃テロである。
　その後の報道で、フランス国内におけるイスラム過激派の増加が伝えられた。フランスは欧州最大の移民国家であり、イスラム系移民の数や比率も欧州一である。その移民の中で、若者の失業率が高く社会への不満が大きい。それが過激派思想浸透の一因だそうだ。

　フランスの隣のスペインはどうか。「世界観光大国ランキング」１位はフランス、２位はアメリカだが、３位はスペインだ。
　スペインでも、2004年に「同時列車爆破テロ」が起きて197人もの死者を出した。イラクからのスペイン軍撤退を要求したイスラム過激派によるテロだ。総選挙直前に引き起こされたこの事件により与党は敗れ、政権交代が実現した。そして、スペイン軍はイラクから撤退した。その後、スペインでは、この種のテロは起きていない。
　ただし、2013年には、高速鉄道ＡＶＥで脱線事故があり、79人の犠牲者が出た。調査の結果、制限速度時速80キロところを179キロ走行していたことが判明した。スペインの高速鉄道の路線にも、日本の新幹線と同様に、最新の自動減速システムが設置してあるのだが、たまたま事故現場付近については、在来線との関係でこのシステムが設置されていなかった。だから、本来は大丈夫だということだが、まあ、いずれにせよ。テロや事故を危惧するばかりでは、日本から一歩も出られない。

　私は13年前のスペイン旅行でマドリッドとバルセロナ、コルドバの3都市を訪れた。Ｋ君は、スペインは今回が初めてだからマドリッドは外せない。だけど、バルセロナとコルドバは外させてもらおう。
　今回は、パッケージ・ツアーでどうだろうかと話し合った。二人とも、今まで経験がないが興味はある。個人旅行よりは安全だろうし、なにより無駄がなく効率的だろう。そこで、いくつか検討してみた。しかし、どれも行程のスケジュールがあわただしくて、（やっぱムリ）と感じた。好きな時間に、好きなところへ行って、好きなものを好きなだけ飲み食いしたい。残り少ない人生だから、わがままを言わせてほしい。
　結局、フライトもホテルも日本の旅行会社のサイトで予約した。フライトは日本航空で、名古屋発、ヘルシンキ経由マドリッドの往復切符。ホテルは、マドリッド（２泊）→セビリア（

２泊）→グラナダ（１泊）→マラガ（１泊）→マドリッド（１泊）。

　サイトのブログによれば、アルハンブラ宮殿見学のチケットについては予約しておいた方がいいということだった。旅行会社のサイトではもう売り切れだったので、ちょっと不安だったが、サイトを通じ現地の会社から予約購入した。合計、一人１５万円弱となった。

2015年6月

6月16日（火）マドリッド着

　飛行機は、ボーディング・ブリッジではなく、待機するバスの前に止まった。タラップから空港に下り立つと、夜の８時半だというのにマドリッドは昼間のように明るい。荷物を受けとって空港ターミナルの外に出ると、たくさんのタクシーがひしめいて２列縦隊にスタンバイしている。
　不愛想な中年の運転手は、
”What time is the sunset here?”
「日没は何時ですか？」
　と私が話しかけても、スペイン語でなにか一言答えただけで、（話しかけるな）といったオーラを発散させながら運転に集中している。車線変更を小刻みに繰り返しながら、前方の車を次々と追い越し、どんどん加速していく。
　衝突すれば、シートベルトをしていないから車外へ放り出され後続車に轢かれて死ぬな、と思った。日本で、そんな事故があったばかりだ。私は身を固くして、窓の上に取り付けられたグリップをぎゅっと握って離さなかった。
　運転手の考えていることは、きっと、少しでも早く空港へ戻って回数をこなし、より多く稼ぎたいということだろう。空港からホテルまでの料金は一律なのか、メーターは30ユーロを表示したまま動かなかった。

　チェックインして部屋に入ると、私は、まずクローゼットの中にあるセイフティ・ボックスをセットすることにした。パスポートや所持金を全部身に着けて外出するわけにはいかない。ホテルは中級以上だから、まさか部屋のセイフティ・ボックスそのものが危ないなどということはないだろう。６桁の暗証番号をうちこむ形式のものだが、説明書通り何度やっても、うまくセットできない。
　フロントに電話した。
“The safe in the room doesn’t work.
「部屋の金庫が作動しません」
　しばらくすると、30代くらいの男がやってきて修理してくれた。
“What was wrong with it?”
「どこが、いけなかったのかな？」
”No, English. Sorry.”
「英語はわかりません。申し訳ない」
　男は、一応すまなそうな表情を見せると、そそくさと出ていった。

　夕食は、ホテルのレストランでとった。ホテルのロビーの奥にあるレストランは、街路に面していて、外来の客も入ってくる。10時だというのに外はまだ明るい。
　まずはビールを飲みたい。英語で「ビア」と注文した。スペイン語の母音は日本語と同じく五

つで、ローマ字式に「ア・イ・ウ・エ・オ」と発音する。また、日本語と同じように母音で終わる単語も多いので、発音そのものは英語よりスペイン語のほうがなじみ易いような気がする。しかし、子音の場合、よく指摘されるｌとｒの違いだけでなく、ｂとｖ の違いや、ｃとｓの違いを私たちは発音できない。

13年前、bar（バル　英語のバー）に入った私は、（とりあえずビール）と、覚えたてのスペイン語でわりと自信をもって　cerveza（セルベッサ　「ビール」）と注文した。するとウエイターは二階を指さして何ごとか言った。あとになって、トイレ（ servicio セルビシオ）と間違えられたことが判明した。日本語では　ce　も　se　も同じ「セ」だが、スペイン語では異なるみたいだ。

今や、英語は世界共通語だ。とくに、ホテルや交通機関、レストランなどでは、初歩的な英語で事足りる。ただ、地元の人に道を訊ねたり、ちょっと話しかけたりするときは英語が通じない場合もある。だから、スペイン語の単語やフレーズも少しは使えるようにしたい。どこを旅行するにしても、その国の言葉で現地の人と、少しでいいから、会話ができれば、その方がだんぜん楽しいと思う。

料理は、Ｋ君がパエリア、私はラム（ lamb　子羊の肉）を注文した。Paella　を日本では「パエリア」と言うが、こちらでは「パエジャ」と発音する。

“It’ll take about 20 minutes. Would it be all right?”

「２０分間かかりますが、よろしいですか？」

ウエイターは、スペイン語訛りの英語で訊いた。やっぱり、２０分もかかるんだ。よく冷えたビールが運ばれたあと、パンの入った小さなバスケットが置かれた。私たちは、マドリッドに無事着いたことを祝して乾杯した。Ｋ君は、下戸でふだん飲まないが、この時ばかりは、一口飲んで「ああ、うまい！」と息を吐いた。

骨付き子羊の肉は、バルサミコ・ソースで煮込んでから焦げ目がつくまでグリルしたものだ。表面はぱりぱりでバジルの香りがした。肉には胡椒やニンニクがよく効いている。パエジャは鍋に入れたまま運んできて、ウエイターが皿に盛りつけてくれた。Ｋ君はその量を見て驚いた。

「うわ、多いな。内田、少し食べない？こんなに食べられないよ」

確かに、日本では二人分といってもいいくらいの量だが、ウエイターは一皿に盛ってＫ君の前に置いたから一人分だろう。

じゃあと言って、私は少し味見をした。

「エビも食べろよ」

と、Ｋ君は、渦巻（うずまき）形のぷりぷりしたエビを私の皿にのせてくれる。

（じゃあ、お返しに、肉を）

とも思ったが、さすがに、レストランの中では行儀が悪いかなと考えて、やめた。

パエジャは、オリーブオイルたっぷりの濃厚な味付けでおいしかったが、二人とも、料理が来る前に、ビールを飲みながらパンをそれぞれひとつ食べてしまった。おいしいパンだった。パン

とビールでお腹がふくれてしまったのか、Ｋ君はパエジャを半分ほど残した。
　もしかしたら、あのパン２個はラムについてきたものかもしれない。パエジャにパンをつけるだろうか？いや、それとも、スペインのレストランでは、料理に関係なくパンを出すのが普通なのかもしれない。
　13年前、出されたパンを食べ終えたら、ウエイターがやってきて　”Mas pan?”　（マス、パン？　もっといりますか？）と訊いた。いらないときは　“No pan”　（ノーパン　パンはもう結構です）というのだそうだ。
　レストランを出るとＫ君は私を振り向いて、指を口元にやった。
「一服してくるから、先に行ってて」
　フロントで訊いたら、Smoking Zone　は中庭で、そこには灰皿が置いてある。出発前に、旅行会社からメールで「お知らせ」が届いた。
「2011年より、スペイン全土で禁煙法が実施されました。ホテルのロビー、レストラン、バルなどの飲食店は全面禁止です」
（そういうことなら、これを機にやめてもいいかな）
　と、Ｋ君もそれなりの覚悟をしてきたようだ。しかし、トランジットのヘルシンキ空港に降りたったとき、搭乗ゲートのラウンジの横に、ガラス張りの大きな分煙室が設置されていて、中で数人の男女が紫煙をくゆらせているのを発見して、やめるのは、まあ今でなくてもいいか、ということになったらしい。

6月17日（水）　トレド、マドリッド市内

「内田、もう８時だぞ！」
　と、Ｋ君にたたき起こされた。窓にはカーテンが引いてはあるが、それにしても朝日は全く感じられない。外の通りも静まりかえっている。枕元に置いた腕時計を手にとった。
「え！？まだ２時だよ」
「あつ、これ日本時間か。ごめん、時計を現地に合わせてなかった」
　二度寝して目を覚ますと、７時を過ぎていた。顔を洗って食堂へ向かう。朝食は７時からだ。廊下に出たが、ホテルの中は静まり返っており、人の気配はなかった。外はまだ真っ暗だ。日が沈むのが遅いから、日の出は早いのかと思ったが違うのか？
　こちらのホテルでは、地上の階が１階ではなく０階になる。エレベーターから出てきた私たちを見て、フロントの青年が不審そうに声をかけてきた。”Hola”、このスペイン語の Hola は、英語の Helloだ。ただしスペイン語は H を発音しないので「オラ」と発音する。日本語にも「オラ、オラ」というのがあるが、全く関連はない。
“The dining room is that?”
「食堂は、あそこかな？」
“Yes, but the dining room opens at 7:00.”
「ええそうです。でも７時からですよ」
　私は腕時計を確かめた。
“It’s already 7:20”.
「もう、７時20分だよ」
“7:20? No, not yet”.
「え？７時20分？まだですよ」
　フロントの青年は、振り返って壁にかかる時計を見上げた。針は６時20分を指している。
「あれ、変だな・・・」と、思わず私はつぶやいた。
　そうか！トランジット（乗り継ぎ）のヘルシンキ空港で乗り遅れてはいけないと考えて、腕時計をヘルシンキの現地時間に合わせて、そのままだ。ヘルシンキとマドリッドは時差が１時間ある、と飛行機の中で表示があった。
“Oh, it’s time difference”
「ああ、時差だ」
　と、私が言うと、フロントの若者は、屈託のない笑い声をあげた。若いっていいよな、笑い声に嫌味が感じられない。
（時差ですか？やっちゃいましたね）
　そんな感じの笑い声だった。時差はマドリッドが日本より８時間遅れだ。ただし、夏時間は７時間遅れとなる。
　いったん部屋に戻った私たちは、７時になると、仕切り直して食堂へ行った。入り口で、スタッフから Hola と声をかけられ、スペイン語で訊ねられた。

numero（ヌメロ　番号）とhabitación（アビタシオン　部屋）が聞きとれたので、
“Room number?”
「部屋番号かい？」
　と問い返し、部屋番号を答えた。スタッフは一覧表に目を落とし、私たちの部屋番号をマーキングすると顔を上げて「ミスターウチダ？」と確認した。日本のホテルのように、朝食券などというものはない。マーキングと朝食券と、どちらが合理的なんだろう？
　朝食は、ビュッフェ形式で品数は結構多い。数種類のハムとベーコンと目玉焼き、ソーセージ、チーズ数種類、スライスした焼き茄子と炒めたマッシュルーム、焼きトマト、煮豆、生野菜。数種類のパンとケーキ。パンをトーストしたければ、トースターに放り込む。パンを乗せた金網がベルトコンベヤー式に奥のほうに回転していく。焼きあがったパンが下に落ちる。そして、手前に出てくる。なるほど、うまくできている。
　飲み物は、数種類のジュースと水、もちろん紅茶とコーヒーもある。ホテルの料金は、ツインで一部屋、朝食付きで1泊12,445円、つまり、ひとり6,223円だから安いと思う。為替が円高に振れれば、もっと安くなる。
　Ｋ君は、あれもこれも、どんどん皿にのせる。私も負けじと皿にとるが、テーブルにのせてみるとＫ君の皿の量にはかなわない。
「すごい食欲だな」
「そうかな？普段は、朝からこんなには食べられないけれどね」

　さて、今回のスペイン旅行は、世界遺産の古都トレドの散策からはじめる。もっとも、スペインには世界遺産が44カ所あって、これは、イタリア、中国に次いで世界３位の数だそうだ。ちなみに日本は18カ所で13位だ。
　トレド（Toledo）は、マドリッドからおよそ70キロで南で、イベリア半島の中心に位置する。タホ川に三方を囲まれ、小高い丘に建つトレドの街は、守りやすく攻めにくい天然の要害をなす。紀元前２世紀、この地に城砦都市を築いたのは古代ローマ人だ。
　ローマ帝国崩壊は、375年のいわゆる「ゲルマン民族大移動」に始まる。このゲルマンの一派がイベリア半島に侵入して西ゴート王国を建設した。そして560年、トレドを王国の首都に選んだ。やがて、彼らはローマ・カトリックに改宗していった。
　German（ゲルマン）民族とは古代ドイツ民族と考えればよい。「ゲルマン」と同じスペルの英語 German は、読みが「ジャーマン」で意味は「ドイツ人」だ。ゲルマン民族とラテン民族、西ヨーロッパの南北に住んでいた民族が、イベリア半島で混ざり合った。

　610年、アラビア半島メッカに住むムハンマド（マホメット）がイスラム教を始め、以後イスラム国家が発展していった。８世紀初めには、イスラム教徒がイベリア半島のほぼ全域を支配した。つまり、キリスト教徒のヨーロッパ人が住んでいたイベリア半島に、イスラム教徒のアラビア人が移り住み、カトリックの文化とイスラムの文化が融合した。
　ところで、西ゴート王国の滅んだ711年の日本の様子はどうだったのか？平城京に遷都し、奈良

時代が始まったのが710年だ。
　８世紀半ばにイスラム国は分裂し、イベリア半島を支配したのが後ウマイア王朝で、首都コルドバを中心に繁栄した。11世紀になると、後ウマイア王朝は滅んで小国に分裂するが、その小国のひとつがトレドを首都にしていた。

　キリスト教徒のアルフォンソ６世が、トレドを奪い返したのが1085年だが、その後も、イスラム教徒のアラビア人は、イベリア半島南部（アンダルシア地方）を支配していた。
　13世紀前半になると、キリスト教徒によるレコンキスタ（国土回復戦争）は勢いを増し、カスティーリャ王国のフェルナンド３世によって、コルドバやセビーリャなどグアダルキビル川流域を中心とするイスラムの主要都市は征服された。ただし、グラナダには新たにナスル王朝が成立し、その後200年間存続する。

　1479年、半島北部のキリスト教国カスティーリャ王女イサベルとアラゴン国のフェルナンド王子が結婚した。これにより、両国は合併してスペイン王国が生まれた。王となった二人は1492年、イスラム最後の拠点グラナダのナスル王朝を陥落させて、国土回復をなし遂げた。
　ローマ教皇は、異教徒からグラナダを「奪還」した二人の功績をたたえ、「カトリック両王」という称号を与えた。なお、イサベル女王は、コロンブスの経済支援をしたことでも有名である。グラナダが陥落した1492年、コロンブスはアメリカ大陸に到達している。
　グラナダのナスル王朝を倒して、キリスト教徒のヨーロッパ人がイベリア半島全体を支配したのが1492年だ。結局、イスラム教徒のアラビア人は、南部（アンダルシア地方）を中心にイベリア半島を400年間から700年間にわたって支配していたことになる。日本の江戸時代が260年間だということを考えると、この400年間から700年間というのは、とてつもなく長期間だ。

　キリスト教徒は、レコンキスタ（国土回復運動）だとか、「奪回した」のだとか言っているが、イスラム教徒にしてみれば、400年間、場所によっては700年間住んでいた土地を奪われたということになる。キリスト教徒は、「奪われた土地を奪い返した」というが、イスラム教徒からすれば、「奪った土地を奪い返された」ということにはならないだろう。
　例えばの話であるが、米国の歴史は、最初の植民から現代までで400年間である。しかし、もしアメリカ先住民が、「レコンキスタだ。奪われた土地を奪い返すのだ。ヨーロッパ人の子孫は出ていけ」などと主張しても、承服できるはずがない。私はK君に話しかけた。
「レコンキスタだなんて、勝手な言い草だよな」
「イスラエルが、イスラム教徒アラブ人からパレスチナの地を取り戻したって主張するのも同じだな」
　1561年、都をトレドからマドリッドに移して王宮を築いたのは、フェルナンドとイサベル「カトリック両王」のひ孫のフェリペ２世である。スペインが全盛期を迎えたときの王だから、この王の名前は記憶しておきたい。
　1580年、ポルトガルを併合してポルトガルのアジア植民地を手に入れると、スペインの領土は

、スペイン、ポルトガル、イタリア南部、オランダ、アメリカ植民地、アジア植民地と世界にまたがり、「太陽の沈まぬ国」と呼ばれた。
　なお。マドリッド遷都の1561年頃の日本はどうだったか？織田信長が桶狭間の戦いで勝利して天下取りにデビューをはたしたのが、1560年である。
　トレドからマドリッドに遷都した理由としてあげられるものに、トレドの街が手狭になったこと、マドリッドは広くて水も森林も豊かだったこと、トレドではカトリック総本山トレド大聖堂の権威が強すぎて王の意のままにならなかったこと、などといろいろあげられる。面白いのは、794年の平安遷都、つまり奈良から京都への遷都の理由と似かよっていることである。奈良の都が手狭になった。伝統ある東大寺や興福寺の権威が強すぎて天皇の意のままにならなかった。
　ところで、奈良市とトレド市は同じ古都ということで、1972年に姉妹都市になった。しかし、今のところ、マドリッドと姉妹都市の提携をしている日本の都市はないそうだ。だったらこの際、「古都から遷都された京都とマドリッド」を姉妹都市にする、というのはどうだろうか？
　トレドへは、アトーチャ駅から鉄道で行こう、ということになった。アトーチャ駅は、ガイドブックの地図によると、ホテル正面の車道を横切って向こう側の歩道にわたり、左にまっすぐ行けばよいのだが、私の方向感覚はまことに危うい。今まで、間違って反対方向に歩いたことも少なくない。どちらの方角をとるか決めるときは、「たぶん、こちらだろう」と予測で歩きだすのはやめよう。いったん立ち止まって、しっかり確かめてから歩き始めること、今回の旅では、そうしようと心に決めた。
　ホテルの玄関前に立ち止っている背広姿の中年男性に訊ねた。
“Excuse me. Which way is it to the station Atocha?”
「すみません。アトーチャ駅は、どの方角ですか？」
　英語で答えてくれるかなと期待したが、“Estación?”「エスタシオン？　駅か？」と、スペイン語が返ってきた。
　二度繰り返してもらって、なんとか、izuquierda （イスキエルダ「左」）とrecto（レクト「まっすぐ」）、gire a la derecho al semáforo.”（ヒレ、ア、ラ、デレチョ「右へ曲がる」アル、セマフォロ「信号で」）という単語を聞き取ることができた。
　駅の構内に入って電光掲示板を見ると、具合のよいことに30分後にトレド行きがある。切符売り場は、その左手にあった。ガラス扉の上の標識にはスペイン語で Billete（ビジェテ　切符）とあり、その下に小さく Ticket Sell と英語がついている。
　中に入ると、いくつかの窓口には、それぞれ10人前後の列ができていて、その上には、Ventana para Hoy （ベンタナ、パラ、オイ「今日の<切符>の窓口」）とスペイン語の標識がある。しかし、列と列の間の窓口がすいているのはなぜだろう？ antes（アンテス「以前に」）という文字があるから、予約した切符を扱う窓口なのかな。でも、その窓口の係はヒマしているんだから、隣の窓口を手伝えばいいのに。　　やっと、私たちの順番が来た。窓口の女性に向かって言った。
“Hola! A Toledo. Two, please”（オラ！ア、トレド、トゥ）

「トレドまで２枚ください」）
“What time would you like? 8:15?”
「何時がよろしいですか？８時15分（の列車）ですか？」

　電光掲示板を見ると14番ホームだ。14番と表示してある扉をくぐると、数メートル先にプラットホーム入口のカウンターがある。しかし、その前に係員が立っていて、「ここから先は入れない」とスペイン語で喋りながら身振り手振りで私たちを追い返す。私が切符を示しても、「ダメだ12番へ行け」と指示する。
　なにか腑に落ちないまま、私たちは12番ホームに急いだ。あまり時間がない。
「走ろう」
　12番の扉の前には、蛍光色の緑のベストを着た駅のスタッフが二人いた。もう行ったり来たり、探し回る余裕はない。念のため、さらに確認したほうがいいな、と考えて、切符を見せ英語とスペイン語で叫んだ。
“Which platform? De que andén?”（デ、ケ、アンデン？）
「どのプラットホームからですか？］
　スタッフの一人が、反対側を指さして「あっちだ」と言った。私たちはあわてて引き返した。進入を阻止された14番の扉の先は出口だった。入ってきた警官に切符を見せて訊いた。警官は14番の入り口へ行くと、私たちを阻止したスタッフに訊ねた。警官は「12番だ、ついて来い」と手招きした。

　12番の扉から中へ入ると、手荷物のＸ線検査の列ができていた。知らなかった、列車でも飛行機と同じように、手荷物検査があるんだ。
　つまり、そういうことか、手荷物検査は一カ所だけ、12番入口ですべて行われる。それを通過した客は、中に設置されている電光掲示板でホームを確認してから各プラットホームに向かうのだ。私たちは、あわてて走ったけれど間に合わなかった。12番ホームに着いたときには、列車はすでに出発した後だった。
　切符売り場の窓口に引き返すと、私は言った。
“We’ve missed the train. Could you change the ticket into the next one?”
「この列車に乗り遅れたました。この切符を次の列車の切符にとり変えてください」
“No, you can’t. You have to buy a ticket for the next one.”
「それはできません。次の列車の切符を買わなければなりません」

　私は、ここは引けないと思った。
“But we went to the 14th entrance. We didn’t know that there is the baggage detection at the 12th entrance. A staff told us to go to the 12th entrance and then the other staff told us to go back to the 14th entrance and go to the 12th again. Finally we didn’t make it.”
「私たちは14番の入り口に行ったんだ。12番の入り口で、手荷物検査があるなんて知らなかった

んだ。ひとりの駅スタッフが12番の入り口に行けと言った。そしたら、別のスタッフが14番に戻れと言って、それから、また12番に戻って、とうとう、乗り遅れたんだ」
“No, you can’t change tickets. You have to buy new one.”
「ダメです。切符は交換できません。改めて、切符を買ってください」

　どうしてもダメだと言う。頭へきて切符売り場から外へ出ると、駅のサービスステーションへ行き、同じようにクレームをつけた。しかし、無駄だった。
　こちらの長距離列車は、日本と違って、すべて座席指定で、日本のように「自由席」というのはない。そして、乗車券の料金と指定席料金との区別がない。だから、乗り遅れた場合、指定席の料金は失うとしても乗車券の分は有効だろう、という日本の論理はスペインには当てはまらないようだ。
　さらにこの列車は、マドリッドからトレドまで直行で途中で停車する駅はなかった。だから、出発するときは、プラットホーム入り口には係員がいて、ひとりひとりの乗車券をバーコード・スキャナでチェックするが、下車するときに出口の前に改札はない。下車した客は、ぞろぞろそのまま出ていく。トレドからマドリッドへの帰りの場合も同じだった。
　手荷物検査を受けたあと、プラットホーム入り口に立つ係員から乗車券をバーコード・スキャナで照合される。これって、飛行機に乗る時と同じゃない。そういえば、列車の切符もフライトの搭乗券と全く同じサイズだ。そういうことに気がついた。スペイン旅行で列車を使うなら、事前に調べておくべきことだった、と思った。
　13年前、初めてスペインを訪れたとき、マドリッドからコルドバまで高速列車を使ったが、手荷物検査の記憶はない。2004年３月11日、マドリッドで同時列車爆破テロがあり197人が犠牲となった。列車で手荷物検査が実施されるようになったのは、そのテロ以降のことかもしれない。

　トレド駅から外に出ると、数人のタクシー運転手がが「４ユーロ」と書かれたプラカードを持って客引きをしていた。「白タク」だな。ガイドブックに「白タクは避けろ」と書いてあった。バスも止まっている。思わず、乗り込んだ。ひとり2.5ユーロだ。がら空きのバスの座席に腰を下ろしてから気がついた。二人分だと、タクシーのほうが安い、まあいいか。

　乗車している客は、私たちの他はひとりだけ、運転手は駅から出てくる観光客のほうを気にしてばかりで、なかなか発車させない。そのうち立ち上がるとバスの乗車口に立って、客引きを始めた。え？なんだ、これは？「白バス」か？やがて、４人連れが乗り込んできた。私は、タクシーのほうが断然安いよ、と言ってあげようかと思った。

　バスは、タホ川に架かる橋を渡って、太陽の門の横を通り過ぎ、古い石畳の坂道をくねくね上ってソコドベール広場（ Plaza de Zocodover ）で止まった。
　石畳の広場に陽光が降りそそいでいる。澄み渡った青空には雲ひとつない。昼盛りの陽ざしは

強いが、空気が乾いているから苦にならない。ときおり、微風がやさしく頬を撫でる。日陰に一歩踏み入れば、涼しいどころか、冷んやりする。この乾いた清涼感は、日本では体感できない感覚で、なんともいえず心地よい。

　まずは、オープン・カフェでひと休みして地図を確認しよう。beard（あごひげ）の似あう若いウエイターがやってきた。私たちがコーヒーを注文するとウエイターは問い返した。

“¿Café solo o café con leche?”（カフェ・ソロ、オ、カフェ・コン・レチェ？）

「ミルクなしですか、ミルクコーヒーですか？）

　そうか、ストレート・コーヒーはカフェ・ソロと言うんだ。solo は英語の only だ。K 君は、カフェ・ソロを頼んだ。私はアイスコーヒーが飲みたくなった。”Iced coffee”（アイスド・カフィ）と言うと、ウエイターは首を傾げた。そうか、「アイスコーヒー」ってないんだ。ウエイターが

”¿Café and ice? 「コーヒーと氷か？」

　と、スペイン語と英語を混ぜて確かめるので、私も（まあ、混ぜればいいか）と考えて、”That’s it.”「それ」と答えた。

　運ばれてきたコーヒーは、デミタス（普通の半分ほどのカップ）のエスプレッソだ。イタリア、フランス、スペインでは、コーヒーといえば、エスプレッソのことだそうだ。ただし、スペインの場合、ほとんどの人が「カフェ・コン・レチェ」（エスプレッソにミルクをたっぷり入れたもの）に砂糖をたっぷり入れて飲むという。con は英語の with で leche は milk。フランス語だと「カフェ・オ・レ」だ。

　私の前には、エスプレッソの小さなカップと四角い大きめの氷が二つ入ったグラスが置かれた。なるほど、コーヒーに砂糖を入れてスプーンでよくかき回してから、グラスに注げば「アイスコーヒー」の出来あがり。

“Pay now?”

「今支払うの？」

“Any time you want.”

「いつでも好きな時にどうぞ」

　イギリスやアイルランドのパブやバーでは、注文した品が来ると、そのつど代金を支払うシステムだ。スペインのカフェは違うんだ。

　まず、広場から近いアルカサル（Alcázar　王城　王宮）を見学することにした。アルカサルは、四隅に塔を備えた四角形の要塞で街の高台に立つ。その威厳ある容貌は、トレドの街から突き出ていて、カテドラルの尖塔とともに、ひときわ目立つ。トレドをイスラム教徒から奪い返したアルフォンソ６世が築いた要塞で、13世紀から16世紀にかけて大幅に改修され今の形になったそうだ。

　スペインは、1479年の建国以来ずっと王政だったが、王政を廃し共和制となったことが２度ある。まず1873年、しかし、これは１年しかもたなかった。２度目に共和制となったのは1931年、第二次世界大戦勃発（1939年）の８年前である。しかし、２度目の共和制も長続きしなかった。1936年、共和国政府に対して軍が反乱を起こし、内戦が始まった。

1936年７月から約１カ月間、トレドの反乱軍は家族や捕虜とともにアルカサルに籠城して政府軍と戦った。８月、南部からマドリッドを目ざしていたフランコ将軍は攻撃目標をトレドに変更し、アルカサルに立てこもる仲間を救出すると公言した。アルカサル攻防戦は、立てこもりから72日間に及んだが、フランコが勝利した。

フランコが名声を得て反乱軍のトップの座に躍り出たのは、このアルカサル攻防戦の勝利によるものだそうだ。そして、1939年、フランコはマドリッドを制圧して内戦の終結を宣言した。第二次世界大戦勃発の５か月前である。以後、フランコの独裁が始まる。

1975年フランコが死ぬと王政が復活し、スペインは立憲君主国家、議会制民主主義の国となった。それにしても1975年といえば、そんなに昔のことでない。私たちが29歳の時である。先進国スペインで40年前まで独裁体制が続いていたなんて、驚きでしかない。

広場の左手から、石畳の坂道を南へ少し登った道路の左手にアルカサルはあった。ところが、扉はしまっている。あれ？水曜日は休館のようだ。私の持つ古いガイドブックには月曜休みと書いてあるのに。やっぱり、ガイドブックは最新のものでないとダメだな。

しかたがない、じゃあ、次は「エル・グレコの家と美術館」まで歩こう。石畳の道路のアップダウンはきついけれど、トレドの旧市街を歩くのは楽しい。石畳の狭い道の両側に、石造りの建物がびっしりと立ち並ぶ。トレドの旧市街は、中世のたたずまいを色濃く残しており、街全体が世界遺産に登録されている。それにしても、こんな狭い坂道を、クルマがときおり上り下りする。そのつど、私たちは古い石の壁に身を寄せる。

エル・グレコは本名ではない。スペイン語の el は定冠詞で、英語の the だ。Greco はイタリア語で「ギリシャ人」だそうだ。だから、エル・グレコは「あのギリシャ人」という意味になる。「あのギリシャ人」って何？日本人でいえば「あのガイジンさん」といった感じかな。「エル・ニーニョ」というのも有名だが、これは「あの男の子」でイエス・キリストのことだそうだ。

ともかく、エル・グレコはギリシャのクレタ島に生まれ、イタリアのヴェネチアとローマで絵画の腕に磨きをかけ、35歳の時トレドに来た。以後40年近く、死ぬまでトレドを離れることはなかった。

エル・グレコは、フェリペ２世の時代の画家である。造営中の王の離宮を飾るため、エル・グレコも注文を受けた。しかし、その作品『聖マウリシオの殉教』は王に気にいられず、宮殿の地下の倉庫に放り込まれたままだったという。今は宮殿の宝だ。

トレドの街はまるで迷路のようだ。通りすがりの人に何度も訊ねて道を確かめ、やっとたどり着いた「エル・グレコの家」の前には、観光客の長い列ができていた。Ｋ君と私は顔を見合わせてため息をついた。

「どうしよう？並ぶ？」

「いやあ、こんな小さな建物にこの列では、何時間も待たされるな。やめよう」

それにしても、傑作『トレドの風景と地図』は見たかったなあ。

私たちは、南に下り、西へむかってトレドの街の端に出た。しかし、境界を縁どるタホ川は見

えない。タホ川の上に切り立つ崖は、この柵よりもう少し先になるのだろう。向かいの丘には赤茶けた岩肌が見え。ところどころ灌木が生えている。
　空はあくまで青く雲ひとつない。遠くには教会の尖塔が見える。こんな光景は日本にはない。私たちはベンチに腰を掛け、目の前に広がる異国の光景を眺めた。400年前トレドにやってきた「天正遣欧少年使節」もこんな風景を見つめていたのだろうか。

　1543年のいわゆる「種子島の鉄砲伝来」で、ポルトガル人が日本の地を踏んだ６年後、カトリックの修道会イエズス会のフランシスコ・ザビエルが来日して布教を始めた。当時の日本は戦国時代後半である。以後、ポルトガル人やスペイン人宣教師が来日して熱心に布教し、信者は九州を中心に２０万人以上に膨れあがったという。戦国大名の中にも洗礼を受けるものがあらわれた。キリシタン大名である。「キリシタン」とは、ポルトガル語でキリスト教徒という意味である。
　いわゆる「天正遣欧少年使節」の４人の少年は、イエズス会の宣教師ヴァリニャーニの発案により、九州のキリシタン大名３名の名代としてヨーロッパに派遣された。わずか13歳から15歳の少年であった使節が、ポルトガル船で長崎を出航したのは、本能寺の変の起こった1582年２月である。アフリカ大陸の南端をまわってポルトガルのリスボンに上陸したのが1584年８月、日本を出てから２年半後のことである。トレドを経て、11月、マドリッドに入った彼らは王宮に迎えられ、当時57歳のフェリペ２世から歓待を受けた。

　11月6日、一行はフェリペ２世から多額の旅費と王の紋章の着いた馬車と通行手形を与えられ、ローマへ向かった。翌1585年３月、一行はローマで大歓迎を受け、教皇に謁見し、のちローマ市民権を与えられる。1586年４月、リスボンから帰路についた一行は、1590年７月に帰国した。８年５カ月の旅であった。
　しかし、日本の事情は、彼らが出国した当時と変わりつつあった。信長の後を継いだ秀吉は九州平定後1587年、バテレン（宣教師）追放令を出した。江戸時代に入るとキリスト教は禁止とされ、４人の少年を待ち受けていたのは、それぞれ病死、棄教、国外追放、殉教という過酷なものであった。
　織田信長はキリスト教の京都における布教を許可した。彼が、布教を許したのは、仏教に対抗させようとしたからだと言われている。豊臣秀吉も徳川家康も、ポルトガル人やスペイン人との貿易を重視し、キリスト教の布教を許可した。そして、キリシタン大名の領内では、神社や寺は破壊され、僧侶は迫害された。

　1580年、キリシタン大名大村純忠は、隣の戦国大名に対抗するため長崎をイエズス会に寄進した。軍資金借入れの担保だという説もある。この年、ポルトガルはスペインよって合併され、スペイン国王フェリペ２世がポルトガル国王を兼ねた。
　1587年に九州を征服した秀吉は、キリスト教勢力が予想を超えて強大になっていることを知った。長崎がイエズス会の領地となっていて、領内の神社仏閣がすべて破壊されたことも知り、

秀吉はイエズス会の責任者に詰問した。
「宣教師は、なぜ神社や寺を破壊し僧侶を迫害するのか？なぜ庶民に信仰を強制するのか？ポルトガル商人が日本人を奴隷として売買しているのはなぜか？」
　当時、スペインやポルトガルの商人は、アメリカやアフリカだけでなくアジアでも積極的に奴隷貿易をしていた。
　秀吉の詰問に対して、イエズス会の回答は、
「信仰の強制はしていない。神社や寺の破壊は信者が自発的にやっていることだ。日本人奴隷の売買は遺憾である」
　などと弁解した。秀吉は、その回答を不満として1587年に「宣教師追放令」を出し、長崎を没収した。長崎は７年間イエズス会の領地であった。

　「天下統一」がもっと遅れていたか、あるいはスペイン、ポルトガルの軍事力が、日本の軍事力より圧倒的に勝っていたならば、長崎も、ポルトガル領のゴア（インド）やマカオ（中国）、スペイン領のマニラのようになっていた可能性は高い。
　天下統一を成し遂げた後、秀吉は勢いに乗って朝鮮国王とスペインのマニラ総督に使者を送り、秀吉に従うよう要求した。朝鮮国王もマニラ総督も折り返し使者を送り、回答をよこしたが秀吉の意にかなう内容ではなかった。秀吉は全国の大名に命令し、1592年と1597年の２度、朝鮮を攻撃した。
　1596年、スペイン船サン・フェリペ号がフィリピンのマニラを出てメキシコへ行く途中、暴風雨に出会って難破し四国の土佐に漂着した。取り調べを受けた乗組員は、スペインがいかに強大であって広い植民地を有しているかを誇ったあと、次のように語った。
「スペインはまず宣教師を送り込んで信者を増やし、その後、兵を送って征服する」
　これを聞いた秀吉は、キリスト教布教と植民地政策との密接な関連を確信し、キリスト教に対して厳しい弾圧政策に乗り出した。京都、大阪に住むスペイン人宣教師5名とポルトガル宣教師１名および日本人信者18名を逮捕し、みせしめとして長崎へ移送し、磔（はりつけ）にした。途中２名の信者が自らの意志で列に加わり、計26名が処刑された。
　しかし、殉教（信仰に命を捧げること）は、かえって宣教師達を奮い立たせ、その後も日本に潜入して布教活動を続けた。日本で活動していた宣教師達が、イエズス会本部に送った手紙の中には、日本を占領すべきだとか、軍隊を送るようスペイン国王に要請すべきだというようなことまで書いたものがある。
　しかし1598年、秀吉は病死した。朝鮮で戦っていた大名達は朝鮮から引きあげた。同じ年、スペインのフェリペ２世も亡くなった。秀吉のフィリピン征服計画も、イエズス会宣教師達が望んだフェリペ２世による日本征服も、どちらも結局実現しなかった。
　秀吉や江戸幕府のキリスト教禁止政策と信者への厳しい弾圧は、日本では否定的に評価されることが多い。現代の基本的人権である「信教の自由」からすれば、当然そうなる。しかし、日本を取り巻く当時の状況を考慮すれば、違った見方が出てくる。
　秀吉が長崎をイエズス会から取り戻し、さらに高圧的な態度で使者をマニラ総督に派遣しても

、江戸幕府が鎖国政策でスペイン人とポルトガル人を日本から閉め出しても、スペイン・ポルトガル両国が日本を武力攻撃することはなかった。当時の日本が強力な軍事力を持っていたからである。
　すでにスペインはアメリカを征服し、アジアではフィリピンを支配下においていた。ポルトガルは1510年、インドのゴアを攻撃して奪い、1557年には中国のマカオに進出しているのである。このような状況の中、日本だけが例外ということはあり得ない。

　アルカサルにもエル・グレコの家にも入れなかった私たちは、カテドラル（大聖堂）を見学することにした。カテドラルなら広いから待つことなく入れるだろう。
カテドラルの入口には、中年女性が紙コップを手に物乞いをしていた。中に入ると、そこは礼拝堂で信者がお祈りをしていた。
「あれ、ここは違うな」
「観光客用の入り口は、別だな」
　そうか、カテドラルは、観光スポットであると同時に、今でも現役の教会なんだ。観光客用の入口は反対側にあった。入り口前のショップで入場券を購入、パンフレットをももらった。最後のページにMuseum opening times（博物館の開館時間）とMass timetable（ミサの時間表）が記してある。ミサは毎日やっている。そして驚いたのは、Confessions（懺悔（ざんげ）　告白）も毎日受け付けている。懺悔の時間は、平日は 8：30 から 11：00 と午後 5：00 から 6：00 まで、日曜祝日は 9：00〜13：00 までだ。ということは、懺悔をする信者が結構いるということだろうが、それにはちょっと驚いた。
　ガイドブックには、この大聖堂はスペイン・カトリックの「首座大司教座」で、1227年フェルナンド３世によって着工され、完成したのは1493年だとある。トレドをイスラム教徒のアラビア人から、アルフォンソ６世が奪い返したのは1085年だが、この大聖堂の着工はそれより140年後のことだ。「首座大司教座」というランクは、よくわからないが、ここの大司教がスペイン・カトリックのトップの地位にあるということだろう。

　ゴシック様式の壮大な大聖堂を見学していると首が疲れる。どうしても、視線が上へ上へと移動する。まっすぐ上へ延びる巨大な石柱の数々、聖書のストリーを上に向かって順に表現している壁の装飾彫刻、天井まで届かんばかりの色鮮やかなステンドグラスの窓、アーチ型の天井。建物の構造は、ひたすら垂直に天上を目ざしているようだ。
　アーチ型の天井には絵が描いてある。聖母マリアとエンゼルが雲の間の青空に、なんといえばいいのか、浮かんでいる。それにしても、天使たちの身体はみなふくよかで、空に浮かんでいるのが、なんとも妙な感じだ。天井の荷重を柱に逃がすため、放射状に広がるリブ（ rib　肋骨）と柱の構造が見事で美しい。
　大聖堂の中に、chapel（礼拝堂）は６つある。大礼拝堂の他、君主たちの礼拝堂とか聖ジェイムズさんとか、聖なんとかさんなどで、それぞれに棺が置かれている。K君が、「あの中に骸（むくろ）が入ってんだね」などと怖いことを言う。

宝物庫には金銀宝石で飾られたいくつかの聖具が展示されていた。聖具室に入ると、正面の壁にエル・グレコの大作『聖衣剥奪』がかかっている。大聖堂からの発注で創作された絵で、十字架にかけられる直前のイエスが衣服を剥がれるシーンが主題だ。右手を胸に置き、天上を見つめるイエスの表情と鮮やかな朱色で大胆に描かれた衣服が目を引く。衣の朱色は実に鮮やかで、本当に、これが400年も前に描かれたものだろうか、と疑ってしまうほどである。K君がつぶやく。
「この衣服は、修復されたんだろうな？鮮やかすぎる」
「どうだろう？」
しかし、この絵の完成後、エル、グレコは、「報酬は支払えない」と大聖堂から通達を受けた。イエスの顔より群衆の位置が高く描かれている点と、マリアが三人登場しているという二つの理由からだという。エル・グレコは告訴した。結局、代金の三分の一が支払われたということだ。

カテドラルを出たあと、ソコドベール広場に戻って昼食とした。レストランの中は禁煙だが、オープン・カフェのテーブルには灰皿が置いてある。私は、ビールとサンドイッチと野菜サラダ、K君はコーヒーとハンバーガーを注文した。
鳥がしきりにさえずっている、オープン・カフェの白い日傘を見上げると、傘の端に数羽の雀が止まって首を左右上下に振り、チュンチュン鳴きながら下をのぞき込んでいる。客が食事を終えテーブルを去ると、さっと舞い降りてきて残り物をついばむ。雀だけではない、鳩もいる。客の足元をちょこちょこ歩き回ってパンくずをついばみ、客を見上げてはチュンチュン鳴いて催促する。
店の従業員も客も鳥を追い払おうとはしない。よく見ると、白い日傘は糞で汚れているし足元にも糞が落ちているが、人々は気にしない。飲み物のグラスや料理の皿に糞が落ちるということはないのだろうか。
「さすがに疲れたな。昨日は、飛行機でもホテルであまり眠れなかった」
「まあ、夜の10時まで明るいのだから一日は長い。いったんホテルへ帰って、ひと寝入りするか」
「それがいいな。それからマドリッドの街へくり出そう」
「勘定をお願いします」は、スペイン語で ”La cuenta, por favor”（ラ、クエンタ、ポルファボール）と言うが、喋らなくても手で合図することができる。ウエイターのほうを見て手を上げ、目が合ったら、上げた手の親指と人さし指をこする。札を数えるしぐさで、何も言わなくても、それで通じる。
“Where’s a nice view spot?”
「景色のいいところはどこ？」
と訊くと、ウエイターは東を指さして言った。
“A five minutes walk”
「歩いて5分です」
そこは展望台になっていて、タホ川の先に広がるトレドの新市街を見渡すことができる。多く

の観光客が群がっている。
“Excuse me, we’re taking a picture.”
「すみません、写真を撮るんで」
　柵にもたれかかって、トレドの新市街を見下ろしていると、背後から声をかけられた。振り向くと若者がカメラを構えていて、私の横にはポーズをとる数人の男女がいる。
“Oh… All right.”
「ああ、いいよ」と私は、横へ移動した。
“Oh thank you. A good man”
　日本語に直訳すると変だけれど、こんな時ときA good man　なんて言うんだ。確か以前にも、どこかで言われたことがある。
　展望台から階段を降りると、長いエスカレーターが設置されていた。なるほど、こういうことなら、駅から歩いてきても苦労しないで広場まで登ることができる。エスカレーターを乗り継いで下まで降りると、そこは駐車場になっていた。
　エスカレーターのおかげで険しい坂道を降りずにすんだので、私たちは駅まで歩くことにした。しかし、しばらく歩いて到達した建物は駅ではなかった。どうも方向が違うらしい。サラリーマン風の青年に訊ねると反対方向だった。ふたりとも、（あれが駅だな）と思いこんで、確認もせず歩きだしたのが間違いだった。結局タクシーを拾うことになる。

　駅舎のベンチに腰をおろして、15；25 発の改札が始まるのを待っていた。プラットホームへの入り口は目の前にある。しばらくすると、電車が到着したのだろう。駅舎の右手の出口から大勢の人があふれてきた。
（あれ？・・・そうか！プラットホームへの入口は左手で出口は右手か、別々なんだ）
　日本の改札のように、自動改札機がいくつもあって、乗車する人も下車した人も同じ改札を通るということではないのだ。だから、下車したときプラットホームで目につく標識が、みな”Salida”（サリダ　出口）になっているんだ。日本であれば、プラットホームの標識は「南口」とか「北口」で、改札を出ると「出口」の標識になる。
　アトーチャ駅の構内から外へ出ると、Ｋ君は、「ここだ、ここだ」と言って、”Tabacos”（タバコ）の看板の店へ入っていった。
「朝、出かけるときに、この看板を見かけてね」
　とＫ君は笑った。スペインは喫煙に対して厳しいと事前にメールで知らされていたので、「やめてもいいかな」と、日本からタバコは持参しなかった。ただ、数本残ったパックだけは捨てきれず持ってきたのだが、それを吸い終えたのだという。Ｋ君は、その空になった箱を店員に手渡して、同じくらいの濃度のタバコをくれと伝えているようだ。店員は、黙ってしばらく空箱を眺めていたが、顔を上げると目の前の棚から適当に一箱とってカウンターに置いた。
　ホテルに着いて、スペインのタバコを一服したＫ君が部屋に戻ってきた。
「くらくらした。パックを見ると、ニコチン濃度は10倍だよ。いい加減な店員だな」
　ホテルで一休みすると、なんだかまた元気な気分が戻ってきた。

「今さら、ひと寝入りは無理だな。出かけよう。マヨール広場で食事にしよう」
　と、私はＫ君を誘った。

　エレベーターから出ると、フロントで声をかけた。
“Call a taxi, please?
「タクシーを呼んでもらえますか？」
“Taxis are outside on the left.”
「タクシーなら、外の左手に待っています」
　ホテルの玄関を出ると、左手にタクシーがスタンバイしている。こちらの発音は、「マヨール」でなく「マジョール」だ。”A Plaza Mayor”「ア・プラサ・マジョール」と発音したら、運転手はすぐにクルマをスタートさせた。

“Keep the change.”「釣りはいいよ」と紙幣を渡したら、運転手は広場の入り口を指さし、”La entrada de la plaza”（ラ、エントラダ、デ、ラ、プラサ　あれが入口）、それから斜め右側の建物を指して”Mercado Para comer ”（メルカド。パラ、コメール）と「あれが市場だ。食事ができる」というようなことを言った。
　約100㍍四方の広場を４階建ての建物がぐるりと囲んでいる。１階はカフェなどの店舗で、２階から上は住居である。広場中央にはフェリペ３世の騎馬像がある。近くから見上げると王のまたがる馬が大きく重量感があって圧倒される。1619年、フェリペ３世によって造られたこの広場では、その昔、王家の儀式、闘牛、祭りから宗教裁判の火刑まで行われ、各々の家のバルコニーから眺められたとのことだ。それにしても、家のバルコニーから火刑まで見物したって、本当かな？

　多数の観光客が広場のあちこちに群がっている。６時過ぎだというのに、太陽は西に少し傾いただけで、陽射しはまだまだ強い。私たちは、広場を出ると、サン・ミゲル市場に入った。

　いや、これは市場というより観光客用のフードコートだな。市場だから、肉も魚も野菜、果物、スイーツ、酒類、各種パンなど何でもあるが、中央にはテーブルと椅子が置かれ、生ビールの販売コーナーもある。客は市場内の気にいった店から、つまみやらサンドイッチやらを買ってきて好きなだけ飲食できる。テーブルは観光客で満席だった。
　しばらく待つと、椅子が二つあいたのでＫ君に確保してもらって、私はつまみの調達に出かけた。まずはハモンだ。スペインの生ハムで、少し塩辛いが独特の風味でおいしい。Ｋ君は初めてだという。肉屋には、天井から生ハムの原木が、いくつもぶら下がっている。原木というのは骨付きのハムの固まりだ。つまり豚の足が乾燥して固い木のようになっているから、その名がある。注文すると、つまみ用にスライスしてくれる。私は注文してからカメラを取り出した。
”Can I take a picture of you?”
「写真をとってもいいかな？」

と、ことわって肉屋の店員がハモンをスライスしている様子を撮る。すると、横にいた観光客も私に便乗してカメラを向ける。それから、魚屋で、タコのマリネと殻つきムール貝の白ワイン蒸しを仕入れ、小エビ、小魚、イカのフライも買った。さらにサンドイッチを加えた。
私たちがふたり並んで腰掛け、テーブルに向かってグラス片手にハモンやタコをつまんでいると、一眼レフのカメラを首にかけた30代後半とおぼしき女性が、あたりを見まわしながらゆっくり歩いてきた。私たちに目を向けると立ち止まって、「撮っていいですか？」と英語で訊いた。私はとっさに ”No” と答えた。13年前、オープン・カフェで食事をしていたとき、子供がポラロイド・カメラで写真を撮ってお金を請求したことを思いだしたからだ。

No と私に言われて、意外な表情を浮かべた女性は、”No?” とおうむ返しに問うた。（あ？違うのか）と私は思い直して、OK と承諾した。写真を撮った女性は、私たちの横を通り過ぎるとき “Gracias!”（グラシアス　ありがとう）と声をかけた。（あれ？観光客かな？）と私は思った。「写真を撮っていいか？」と英語で話しかけたのに、Gracias!　とスペイン語で礼を言ったということは、私たちを地元の飲んだくれ老人だと思ったのかもしれない。
私が、最初なぜ断ったか、その理由を説明すると、Ｋ君は真顔で言った。
「地元の雑誌の編集者かなんかで、マーケットを取材しているんじゃないか？」
「観光客だろ。地元の老人ふたりが一杯やってると思ったんじゃないかな」
「そうかな、案外、知的な雰囲気の女性だったよ」
「地元の老人だと思ったんだよ。Ｋ君の風貌はなんか味があって、グレコの絵に出てくる信心深い老人みたいだよ」
「アハハ」
しかし、Ｋ君は、やっぱり雑誌の編集者だと思っているみたいだ。でも、私は、観光客だと思う。まあ、お互い歳をとると思いこみが激しくなるものだ。

市場を出ると、外はまだ昼間のように明るい。喉をうるおし、お腹を満たした私たちは、Puerta del Sol（プエルタ・デル・ソル太陽の門）まで歩いた。この広場からスペイン各地へ9本の道路が放射状に延びており、ここには、スペインの国道の起点を示す０㎞の標識が埋め込められている。東京の日本橋と同じだ。
大晦日（おおみそか）の晩、この広場には人々がぎっしり詰めかけ、マドリッド自治政府庁舎の大時計台の鐘に合わせてカウントダウンをする。そして、新年を迎えると同時に周囲の人と誰彼かまわず頬を寄せ合いキスをして新年を祝う。そんなのが、年中行事となっているそうだ。ロンドンのトラファルガー広場でも、同じようなイベントが行われていると聞いたことがある。

私たちは、ソル広場から西に向かって歩き始めた。次は Palacio Real（パラシオ・レアル王宮）へ行ってみよう。広場から延びる道路の両側に、びっしりと立ち並ぶ石造りの建物は、中世の面影を残している。私たちは、いつまでも減る気配のない人混みの中を歩きまわった。
「若者が多いね。ロシアでも、夜遅くまで街に人が群れていたけれど、年寄りが多かったな」

2年前にロシアを旅行したＫ君が感心したようにつぶやく。確かに、若者が多いし、子どもも結構いる。子どもたちは、いったい何時に家路につくのだろう？
「西洋人って、若いうちは、きれいな娘が多いね」
と、私が言うと、Ｋ君はうなずく。
「そうそう、だけど、中年になると、あんなにも太ってしまって、落差が大きいね。あれは何だろ？遺伝かな、それとも食べ物かな？」
「さあね。・・・金髪で色白の幼い子供なんか、天使のようにかわいいけれど、西洋人からすると逆みたいで、日本の子供ってどうしてあんなにかわいいの？って訊かれたことがあるよ」
「へえー、そう？」
ふたりとも行き当たりばったりで計画性がない、時々迷っては道を訊(たず)ねる。訊ねる相手は地元の人でないとダメだ。できれば年配の男性がいい。ひとりで歩いている女性は老若にかかわらず避けたほうがよい。ナンパだと誤解される。

石畳の古い街並みを歩きまわることは楽しいものだ。次から次へと広場が現れ、人々が群れている。庭園があって像が立ち、涼しげな噴水がある。突然、教会やカテドラルの鐘楼が鳴り響く。おしゃれなカフエやバルがいくつもあって、街路にせり出したテーブルには、大勢の人々がいて、ビールやワインのグラスを傾け談笑している。空はいつまでも明るく、暑くも寒くもない。そして蚊がいない。空気は乾き、ときおり微(かす)かな風が頬を撫でる。
王宮にたどり着いたときは、すでに閉館時間の８時をまわっていた。青空を背景に堂々とそびえ立つ白亜の王宮は、アルメリア広場に面している。私たちは、広場の手前の鉄柵の間から、その威風を眺め、ため息をついた。150㍍四方の建物には、3400もの部屋があるという。
日本でいうと、桶狭間の戦の翌年の1561年、マドリッドに都を移したフェリペ２世は、ここに王宮を築いた。1584年、日本からやってきた「天正遣欧使節」の４人の少年は、この王宮でフェリペ２世に謁見した。王は４人を抱擁し歓迎したと記録されている。ただ、最初の王宮は焼失し、現在のものは1764年に完成した新宮殿である。
王宮の南には、広場を隔てアルムデーナ大聖堂の正門が両側に尖塔を備えてそびえ立っている。この辺りは街全体が博物館だ。
「疲れたな、もう帰ろうか」
と、私が提案するとＫ君が応えた。
「帰りは地下鉄に乗ってみよう」
「そうだな、だけど、ガイドブックには、スリに気をつけろと書いてあるよ」
「そう？わかった、気をつけるよ。じゃあ、オペラ座の前の広場にメトロの入り口があったから、あそこまで戻ろう」
メトロ入口の階段を降りると切符の自動販売機があった。一日歩き回って疲れがでたのか、私は自分の頭で考えるのがおっくうになって、緑のベストを着たメトロ従業員の男女に英語で訊ねた。
“Excuse me, tell me how to use this vending machine?”

「すみません。この自販機はどうやって使うのですか？」
　英語はダメみたいだ。やはりと思って、スペイン語の決まり文句を発音した。
“¿Cómo se usa este vendedor automático? Vamos a la estación Atocha.（コモ、セ、ウサ、エステ
　ベンデドール、アウトマティコ？ヴァモス・ア、ラ、エスタシオン・アトーチャ？
「この自動販売機は、どうやって使うのですか？私たちはアトーチャ駅へ行くんです）
　ものを尋ねるとき、こちらから喋るのは、あまり問題ない。覚えているフレーズを一方的に言うだけだ。しかし、それに応える相手のスペイン語を聞き取るのは難しい。わからないという私たちの表情を見て、スタッフ二人が自販機の横に立って、喋りながら指で指示してくれる。
　まず、「1回券」か「１０回券」のどちらかを選ぶ。日本の機械には、こんなのはない。だから、予備知識がないと面食らう。つまり最初からつまずく。次は行先だ。画面の destino（デスティノ　行先）をタッチするとアルファベット「ABC・・・」のキイボードが出てくる。（なんだこれは）と、一瞬動きが止まる。すると、横から女性スタッフが A をタッチしてくれた。画面には、A を頭文字とする駅名がずらっと並ぶ。私は Atocha にタッチする。次は切符の枚数だ。なるほど「＋」を触ると 1 枚ずつ増える。そして、料金が表示される。たぶん、横に立つスタッフは ”Mete el dinero.”（メテ、エル、ディネロ　お金を入れて）と言ったのだと思う。あわてて財布を取り出し、（え、どこ？）とまごまごしていたら、最初の画面に戻ってしまった。横から画面をのぞきこむスタッフは、ため息をついて私を見ると「やりなおし」という顔をした。
　切符を手に入れて、私は確認した。
“¿De que andén? Que numero?”
（デ、ケ、アンデン？ ケ、ヌメロ？)
「どのプラットホームですか　何番ですか？」
“Dos y…”（ドス、イ　「２番で・・・」）
　そのあと何を言っているのか理解できない。すると、スタッフは改札の隣にある路線図を示して説明した。（2番線に乗って、次の駅 「Sol」 で 1 番線に乗り換える）と言っているようだ。”Cambiar?”（カンビアル　「乗り換えるのか？」）と訊くと ”Si”（スィ　「そうだ」）とうなずいた。
”Muchas gracias（ムチャス　グラシアス　「どうもありがとう」）
　と、礼を言って、私たちは自動改札機に切符を入れて改札を通った。あれ？地下鉄には、日本と同じように自動改札機があるんだ。
　Sol 駅で降りて1番ホームへ移動した。しかし、行先の案内板を見ると、Atocha の名がない。（あれ違うのか）と、近くにいた中年男性に切符を見せて訊いた。
“Is this the right platform for la estación Atocha?”
「アートチャ駅は、このホームでいいのですか?」
（あら、英語とスペイン語が混ざっちゃった）。男性は、案内板に近づいて確認すると、線路の向こう側を指さしてなにやら言った。私が opposite side? 「反対側ですか？」と英語で訊くと、うなずき「ハ・ン・タ・イ」と日本語で言って笑った。私たちは、驚いて相手の顔を振り返った。それから、「ありがとう」と日本語で礼を述べ、階段を駆け上った。なぜ日本人と分かったん

だろう？

Atocha Renfe（国鉄　アトーチャ駅）で下車した。腑に落ちないのは、出口に改札がないことだ。座席指定の長距離列車と違って、メトロの場合、行先で切符の価格が異なる。車内での検札もなく下車する際に改札もなければ、一駅分の切符でどこまででも乗れてしまうと思うのだが違うのかな。ちょっとこのあたりのことがわからない。

階段を上って地上に出ると、道路の向かいに立派な駅舎があった。私たちのホテル側に位置する駅の入り口は、古くて小さな建物だったが、こちら側は新しく大きく近代的な建物だ。疲れた私たちはタクシーを拾ってホテルに帰った。それにしてもよく歩いたものだ。

18日（木）　プラド美術館、セビーリャへ

　今朝も朝食をしっかり食べた。この分なら昼飯抜きでも全然問題ない。今日はプラド美術館を見学し、それから高速鉄道 AVE でセビーリャへ行く。
“Can you keep our suitcases here?”
「スーツケースを預かってもらえますか？」
“Sure.”
「かしこまりました」
“Can we walk to Prado Museum? Is it a walking distance?
「プラド美術館まで歩いて行けますか？歩いて行ける距離ですか？」
“It takes 20 minutes on foot.”
「歩いて20分かかります」
　え？20分。じゃあ、タクシーで行こう。
　タクシーはアトーチャ駅を通り越して Paseo del Prado （パセオ、デル、プラド「プラド通り」）に乗り入れた。通勤時間だろう、道路は混雑していた。右手は遊歩道になっていて、道沿いの樹々が涼しげな日陰をつくっている。新しく植えられた街路樹ではない。樹齢を重ねた大きな樹々に、初夏の緑葉が豊かに茂っている。
「マドリッドって樹が多いね」
　とＫ君が感心する。
「都市の全面積の60％が緑地で、緑地率は世界第2位だって本に書いてあったよ」
「え？マドリッドって乾燥してるんじゃないの」
「降水量は少ないけれど、中央山系からの川の水や湧き水にも恵まれていて、マドリッドの語源はラテン語で『水源』とか『湧き水』だって」

　開館は10時なのに、９時前に着いてしまった。チケット売り場の前に、並ぶ人はまだ見当たらない。今日も空は青い。朝の陽射しは明るく眩しい。私たちは、あたりを散策した。少し冷えを感じる。長袖にするべきだったかな。
　40分前になると数人のスタッフが現れて、ポールを立てテープを張ってチケット売り場に並ぶ順路を作り始めた。私たちは先頭の次に並んだ。朝の冷気が消え、徐々に気温が上がってきた。
　案内板を見ると、65歳以上は半額とある。14ユーロの半額だから７ユーロか、identification（身分証明書）の提示が必要とある。しかし、パスポートは持っていない。もち歩かないほうが安全だとガイドブックに書いてあったから、ホテルのセイフティ・ボックスに入れてきた。一応、言ってみるがダメだろうな。
“I’m over 65 years old. But I don’t have my passport now. I left it at the hotel.”
「私は65歳を超えています。でも、パスポートは、今もっていません。ホテルに置いてきました」
　やっぱり、ダメだった。美術館も維持費で大変だろうから、まあいいか。

ゴヤ門から入場した私たちは、スペイン絵画の部屋を次から次へ、大雑把に見てから２階フロアへ進んだ。ひとつひとつをゆっくり見ている時間も体力もない。部屋に入るとざっと見まわし、気になる作品を見つけたり著名な作品に気づいたりすると近寄っていってゆっくり鑑賞する。

ベラスケスの晩年の傑作『Las Meninas　ラス・メニナス　女官たち』は縦318㎝横276㎝の大作だ。国王フェリペ４世の宮廷画家ベラスケスが大きなカンバスを立てて、愛らしく着飾った王女マルゲリータを描いている。黙ってポーズをとるのに疲れて「もう嫌や」と拗(す)ねる王女を女官がなだめている。王女のお気に入りの犬と道化と少年もいる。

そこへ国王夫妻が立ち寄ったところだ。部屋の奥にかけられた鏡に二人の姿が写っている。部屋の中の人々は国王夫妻に気づく。侍女があわてて立ち上がり、衣服の裾(すそ)を抑え膝を曲げて宮廷式の挨拶をする。気づかないのは王女をなだめている女官だけだ。カンバスに目を向けていたベラスケスも顔を上げた。そんな一瞬を切り取って描いた作品そうだ。

なるほど、しかし、予備知識なく絵を見るだけで、そんな場面が想像できるだろうか？当時の宮廷の人々は、この絵を見て「あら、これは」と、その状況をすぐに把握できたのだろうが、現代の私たちにはちょっと難しいかな。なお、当時のスペイン宮廷では慰みものとして異形(いぎょう)の人々が集められ、その中に「小人(こびと)」もいた。王女の遊び相手で、犬を蹴っている少年も小人だそうだ。

ゴヤの『カルロス４世の家族』の前には人が群れていて、ガイドが熱を入れて説明している。この作品は、ゴヤが首席宮廷画家となってから最初に描いたものだそうだ。縦280㎝横336㎝の大画面の中央には、王ではなく王妃マリア・ルイーサが立つ。王妃は右脇にピタリと寄り添う王女の肩を抱きよせ、左手で幼い王子の手を握っている。カルロス４世は、王妃の右手に並び、王と王妃の子である皇太子は左端に立つ。
画面には合計13人の王族が描かれている。そして、左奥の暗い部分に、あのベラスケスと同じようなポーズで、大きなキャンバスにむかうゴヤの姿が描きこんである。ゴヤはベラスケスよりずっと後の人で、ベラスケスの死から86年後に生まれた。日本人の感覚では、雇い主である君主一族の絵の中に、画家自身の姿を書き込むなんて到底考えられないことだが、当時のスペインでは全く問題なかったのだろうか？

この絵が描かれた1800年は、王が52歳、王妃48、皇太子は17歳、王妃が抱きかかえる王女は11歳で王子はまだ６歳である。ということは、この幼い王子は王妃42歳の時の子だ。国王は狩りにしか興味を示さず、国政は若き首相ゴドイに任せきりである。王妃とゴドイは不倫関係にあり、実は、王妃の両側に立つ幼い王女と王子はゴドイとの間にできた子だという。しかも、そのことは、宮廷のみならず国民にも広く知れ渡っていたというから驚きだ。17歳の皇太子は、無能な父を軽蔑し母には反抗した。そしてゴドイには深い憎しみを抱いていた。当然だろう。

画面、室内には左上から光が差し込み、絢爛(けんらん)たる衣装と宝石に飾られた一族が浮かび上がっている。堂々とポーズをとるカルロス４世は、黒っぽい礼服に身を包み、その胸には、大小の勲章が燦然(さんぜん)と輝いている。スペイン・ブルボン王家のトップにふさわしい威厳と気品が漂っていると

説明されれば、まあ、そんな風にも感じられないこともない。しかし、その上品で人の良さそうな顔からは、難局に立ち向かう強い意志は感じられない。失礼な感想だけれど、王妃の不倫も政治もほったらかしにしている国王だという事情を知っているから、どうしてもそんな感想を持ってしまう。

　それと対照的なのが王妃の姿だ。若くもなければ美しくもない。微笑んでポーズをとっているものの、その表情は不自然で硬い。若き愛人との間にできた幼子二人をしかと守り、私が生きている間に、しかるべき地位につかせなければという、そんな強い意志が感じられる。宮廷画家でありながら、雇い主の心の内までというか家庭の事情まで、臆することなく描ききってしまうのだから、ゴヤ画伯もやるもんだ。
　それにしても、差し込む光に燦然（さんぜん）と輝く衣装や宝石を描いた筆づかいの見事さはどうだ。間近に見ていると、ため息が出るほど美しい。こんなタッチは本物を見なければ到底わからない。そして、こんなにもみずみずしい絵が、200年も前に描かれたとはとても信じられない。修復でもしたのだろうか？
　カルロス４世が即位したのは1788年で、フランス革命勃発の前年である。革命は、内乱を経てナポレオンの独裁へと展開していき、1804年、ナポレオンは皇帝に即位した。ゴドイはフランスに急接近し同盟関係を結んだ。しかし、1805年、フランス・スペイン連合艦隊は、トラファルガーの海戦でイギリス海軍に大敗した。
　その後、皇太子とゴドイとカルロス４世が三つどもえとなって王位を争うが、結局、ナポレオンに支配され、あろうことか、スペイン王にはナポレオンの兄ジョゼフがつく。
　1808年、マドリッド市民は立ち上がり、駐屯するフランス軍に襲いかかった。が、たちまち鎮圧された。ゴヤの有名な作品『1808年5月2日』や『1808年5月3日　モンクロアの銃殺』が、その事件を生き生きと描き出している。フランス軍に対するマッドリッド市民のこの反乱はすぐに鎮圧されたが、しかし、その後、反仏闘争は全国に広がり、ナポレオン没落の発端となったのである。

　ムリーリョの代表作『無原罪の御宿り』が壁にかかっている。清純なマリアが天から降り立ち母アンナの胎内に宿るシーンだ。太陽の光に包まれたマリアは三日月に乗り、可憐な天使たちがマリアを取り巻いている。絵全体の色調が、柔らかく繊細で輝きを放っている。日本人にも人気の高い画家で、「清純な乙女のようなマリア像には癒される」などと解説書に書かれている。
　それにしても、この日本語名の「無原罪の御宿り」ってなんだ？原題はラテン語”Immaculata Conceptio Beatae Virginis Mariae”で、それを英訳したものが”Immaculate Conception”である。Immaculate は「汚れのない、清い、純潔の」でConceptionは「妊娠」である。
　処女マリアが神の子イエスを身ごもったことを表す日本語は、「処女懐胎」とか「処女受胎」で”virgin birth”の日本語訳だが、これは”Immaculate Conception”と同じ意味だ。
　処女マリアは、純潔のまま神の子イエスを宿した聖母である。であれば、マリアを宿したマリアの母も純潔でなければ都合が悪い。つまり、清純なマリアは、処女のまま神の子イエスを宿

すが、彼女自身も原罪（性交）を経ないで母アンナの胎内に宿ったというカトリックの教義である。
（えっ、セックスって原罪なの？）とか、（じゃあマリアの母の母も「純潔の妊娠」なの、きりないじゃん？）などと不心得なことを言ってはいけない。
マリアの「処女受胎」も、そのマリアが天から降り立ち母アンナの胎内に宿ることも「処女受胎」という点で同じ現象だと思われるが、日本語では両者を区別して「処女受胎」と「無原罪の御宿り」と表現をしているのだろうか？英語では”virgin birth” と”Immaculate Conception”とに区別しているのかな？よくわからない。
ともかく、「無原罪の御宿り」は９世紀に唱えられた考えで、古くからキリスト教信者の間で信仰されてきた。だから、エル・グレコにもベラスケスにも、この主題で描いた作品がある。ちなみに、ムリーリョはベラスケスと同じくセビーリャ生まれで17歳年下である。そして、セビーリャなどアンダルシア（南スペイン）では、マリアを普通の人間ではなく聖なる存在とするマリア信仰が盛んで、この「無原罪の御宿り」は人気ある主題だそうだ。

エル・グレコやムリーリョの描くマリアは、キリスト教徒ではなくても人の心を魅了する。日本の大原美術館にもエル・グレコの『受胎告知』がある。聖霊がマリアに対し、神の子イエスを身ごもることを告げている場面だ。マリアは左手で読みかけの聖書のページを押さえ、驚いている。そりゃあ驚くでしょう、いきなり、そんなことを告げられれば。しかし、その表情は実に落ち着いており、神の命令に逆らわず、謹んでその運命を受け入れるマリアの清純無垢な心が伝わってくる。
しかし、処女マリアの清純無垢な表情や聖母マリアの母性愛に満ちた表情など、人間の感情や考えで解釈してマリアを描いていけば、聖なる存在がどんどん人間に近づいてくる。それは神に対する 冒涜(ぼうとく) ではないのか？イスラム教が「偶像崇拝」を禁止しているのも、そういうことと関係あるのかな、よくわからないが。

次から次へと、スペインの巨匠たちの作品が現れる。聖書を主題にした油絵をぶっ続けで見ていると疲れがどっと出てくる。油絵具の重厚なタッチに気分が重くなる。こんなとき、気分転換に日本画がみられるといいな。そうだな、軽いタッチの版画がいい。広重の『東海道五十三次』とか、北斎の『富嶽三十六景』で一息つきたい。

疲れ切った私たちは、美術館を出ると、大通りを挟んだ向い側のカフェで昼食をとった。二人ともハモンのサンドイッチで、飲み物は私がビールでＫ君はコーヒー。ウエイトレスは若くて愛想のいい娘だった。それから、歩いてホテルまで戻ると荷物を受け取った。
セビーリャ行の列車はスペインの新幹線 AVEで、15：00発の17：20着。全席指定である。私たちは、手荷物検査を済ませ、係員に切符を渡して改札を済ませると Coche4（コチェ　4号車)のPlaza6Aと6B（プラサ　座席6Aと6B）に座った。

マドリッドを出てしばらくすると、車窓には赤茶けた丘陵とオリーブ畑の単調な風景が広がった。座席に背を持たれ目をつむると、私は疲労感を覚えた。そして、そのまま眠ってしまったようだ。

列車はセビーリャ駅までノンストップで走った。駅構内を出てタクシー・スタンドに並んだ。私の前に並ぶ男は、バックパックを肩にかけている。私はバックパックを持ってないことに気が付いた。
（しまった！列車に置き忘れた）
私はＫ君にそう告げると、駅構内に引き返した。どうしよう？通りがかった警察官に切符を見せて訊いた。
“I left my backpack in the train. What should I do?”
「バックパックを列車の中に置き忘れた。どうすればいいですか？」
警察官は、無線で連絡を取ると、私を中へ連れていき、プラットホームに止まる列車の一つを指さし「あれだ」と言った。列車はまだ止まっている。私はプラットホームを４号車まで駆けた。列車は清掃中で、バックパックは網棚に載せたままになっており、その下の座席にはＫ君の帽子が置き忘れてあった。

ホテルにチェックインし、部屋に荷物を置くとフロントで訊いた。
“We’re going to see flamencos. Tell us where we can see good flamencos?”
「フラメンコ鑑賞に行くんだけど、どこがいいですか？」

フラメンコが誕生したのはアンダルシア地方で、セビージャはフラメンコの本場だ。2010年、フラメンコはユネスコ世界文化遺産にも登録された。セビージャ観光にフラメンコ鑑賞は欠かせない。フロントの女性はパンフレットを手に、ディナー付とディナーなしの tablao（タブラオ）を紹介してくれた。
tabla（タブラ）は英語の table の兄弟かな？「板、表」の意味で、tablado（タブラド）が「板張り、舞台」でtablao は「フラメンコのショー」、「それを見せるナイトクラブ」という意味だ。
私たちはディナーなしを選んだ。その Los Gallos（ロス・ガリョスあるいはロス・ガジョス）という店は、ガイドブックにも載っていて、「老舗（しにせ）、レベルが高い」と紹介されている。公演は８時からと10時からの２回で、私たちは８時からのショーを見ることにした。

６時半、私たちはタクシーで出かけた。タブラオは大通りから横に入った狭い路地に面していた。入り口で腰を掛け読書をしている店番の青年からチケットを購入した。35ユーロでワンドリンクつき、店は、開演30分前の７時半にオープンするそうだ。
「先に夕飯を済ませておこうか」
「そのほうがいいな」

私たちは、大通りまで戻ってバルを見つけると、外のテーブルについた。入口に小黒板が二つ立てかけてあって、それぞれ para comer（パラ、コメール）、para beber（パラ、ベベール）とある。この表示は一般的なもので、para は「のために」で comer は「食べる」、beber は「飲む」だから、訳しにくいのだが、日本のメニューだと「お食事」と「お飲物」ということになる。バルに入った時、ウエイターから ”para comer?” と訊かれれば「お食事ですか？」と問われたことになる。

注文を取りに来たウエイターに ”para comer?”「食事だけど？」と訊くと、7時からだという。しかたがないので、私はビール大とフライドポテト、Ｋ君はビール小で食事時間の来るのを待つことにした。

ぼんやりと通りを眺めてビールを飲んでいると、3人連れの若者が現れ、店の入り口横に立った。ひとりはギターを抱えている。リーダー格の、顎髭（あごひげ）を生やし人相のあまりよろしくない身体のデカイ若者がテーブルの客に向かって何事か叫んだ。何事だろうと眺めていた私とその若者の目が合った。彼はニヤッと笑みを浮かべて頭を下げた。まずい、と思って私は目をそらした。へたくそなギターとへたくそな歌だった。若者たちは手拍子をして声を張り上げた。フラメンコの歌のつもりらしい。

歌を終えると、案の定、顎髭の兄ちゃんは真っ先に私のところへやってきて、ギターのボディを私の目の前に突きだした。”No”と手を振ると、何事か言ってギターをさらに突きだす。「オレたちは一生懸命歌って、あんたは聴いてたんだろ」とすごんだのかもしれない。まあ、仕方がないか、私は ”Ok” と答えてポケットを探ると２ユーロ硬貨が出てきたので、それをギターのボディにのせてやった。それから、兄ちゃんは他のテーブルを回ったが、誰も相手にしなかった。

この間、ウエイターは店の中へ引っ込んだまま外に出てこようともしなかった。日本なら、店員があんな連中は追い払うだろうが、何もしない。店としても、彼らを歓迎しているのではないのだろうが、止めはしない。違法ではないからということかな。

ロス・ガジョスに入ると、私たちは前から3番目の列に腰をおろした。舞台は思ったより狭い。やがて、舞台手前から Guitarrista（ギタリスタ）と Cantaor（カンタオール　歌い手）が登場し、ギタリスタは舞台中央の奥に椅子を移動させると腰をおろした。その横にカンタオールが立つ。二人とも中年の男性だ。

ギタリスタは、入念に調弦をしてから弾きはじめた。カンタオールがパーカッションのように手を打ち鳴らし、靴を踏み鳴らす。この手拍子を Palmas（パルマ）という。ギターの音と手拍子が徐々に強くなり、カンタオールが目をつむり声を張り上げて、何かを訴えるように、せつなく歌う。すると横手のらせん階段から、豪華な衣装に身を包んだ踊り手が、まるで歌声に誘い出されたかのように降りてきて舞台に立つ。踊り手を Bailadora（バイラドーラ）という。手に持つ扇を巧みに扱い、靴を踏み鳴らし身体をよじり、ドレスの裾をひるがえして情熱的に踊る。カンタオールがさらに歌い、踊り手を誘い煽る。ギタリスタがひときわ激しく弦をかき鳴らす。曲の

区切り区切りでは、歌と踊りとギターと手拍子と足のタップがピタッと一致して止まる。実に見事だ。

踊り手のフリルいっぱいのスカートの後ろの裾には、まるで雄鶏の尾のような部分がくっついている。踊り子は身をくねらせ、靴を踏み鳴らし、靴を蹴りあげドレスの尾をひるがえす。なるほど、店の名のgallo（ガジョ）は「雄鶏」で舞台横の壁には雄鶏の絵が描いてある。

次は Cantaora（カンタオーラ　女性歌手）のソロである。情感をこめて数曲歌ったが、残念ながら、歌詞の意味が全く分からないのだから感動もいまひとつだった。

三番手の踊り子は、若い娘だけれど、とても怖い顔をして登場してきた。そして最後まで怖い顔で踊った。手にはなにも持たず、両腕を上げ、指を鳴らし、腕と手をしなやかにくねらせ、身体をよじる。激しく靴を踏み鳴らし、両手で自分の胸や腿（もも）を打ち鳴らす。それにしても、何だろうこの怖い顔は？フラメンコは、人生の喜怒哀楽だけでなく死後の世界をも表現するそうだが、カンテ（歌）の歌詞が理解できなくて残念だ。

フラメンコは日本の能と共通するところがあると思う。どちらも板張りの狭い舞台、謡（うたい）と囃子（はやし）がフラメンコのカンテで、太鼓（たいこ）・大鼓（おおつづみ）・小鼓（こつづみ）がフラメンコの手拍子とタップダンスだ。大鼓と小鼓は「ヨー」とか「オウ」とか掛け声をかけるが、フラメンコではカンタオールが「オレ」と声をかける。そしてテーマが人生の喜怒哀楽で、死後の世界もある。三番手の踊り子の怖い顔は、まるで能の般若（はんにゃ）のようだった。

次は、ギターのソロだ。激しく弦をかき鳴らしたかと思うと、さっと穏やかなトレモロ奏法に移る。このギタリストの腕がどの程度なのか私にはわからないが、ギターのソロが独立の演目で設定されているのだから、フラメンコとは踊りだよ、ということではなく、歌とギターも、独立して鑑賞されうる重要な要素である、ということだと思う。

四番手の踊り子が登場した。「おや、年増だね」などとＫ君が古風な表現でつぶやく。背中を思いっきり後ろに反らし、コミカルな表情で舞台を歩いてみせる。あんなに反り返って、ひっくり返らないのが不思議だ。踊りの端々（はしばし）にもユーモラスな表現がみられる。きっとテーマは喜劇だな。踊り子は年増だけれど、よく見ると、若い頃はきっと美人だっただろうと思う。しかし、いつまでも若さと美貌を売りにするわけにはいかない。齢をとれば、少し三枚目でアピールするほうが無難なんだろう。

１時間半の公演は、そんな時間を全く感じさせず、私たちは、ロス・ガリョスの本格派フラメンコを大いに楽しんだ。

ホテルに戻ると、ひと風呂浴びてから、といってもバスタブだけれど、私はホテルのバーでビールを楽しんだ。３ユーロで「お通し」に小皿に載せたオリーブの実を出す。種入りの漬物だ。日本で食べるオリーブの実は、さほどおいしいとは思わないが、こちらで出されるものはビールにマッチしておいしい。

19日（金）セビーリャ市内、フラメンコ鑑賞

　いつものように朝食をたらふく食べてから出かけた。今日も空は青い。地図を見ると、 Plaza de España（プラサ・デ・エスパーニャ　「スペイン広場」）はホテルから近い。ホテルの前の大通りを西に10分ほど歩く。
　スペイン広場は、1929年の万博の会場として造られたものである。レンガ造りの広くて長い回廊が両翼に半円形に延びる。その前には水路が設けられ、アーチ型の橋がかかる。回廊の側面にはタイルでスペイン各県の歴史が描かれている。イスラム様式を取り入れたスペイン建築だ。
　どこまでも青く澄み渡る青空の下、眩しく輝く白い石畳の広場の中央には噴水が涼しげに吹きあげ、観光客を乗せた馬車がひずめの音を軽快に響かせて横切る。
　しかし、観光客はまばらで、あちらこちらから声をかける物売りが鬱陶(うっとう)しい。石畳の上に布を敷き、扇とかスカーフとか帽子など安っぽい品々を並べている。

　広場を後にすると、私たちは、セビーリャ大学を目ざして歩いた。1750年にタバコ工場として建てられたもので、ビゼーのオペラ『カルメン』の舞台になった。工場で働く魔性の女カルメンと純朴な衛兵ドン・ホセの物語だ。事件を起こして捕らわれたカルメンを護送するホセ。カルメンはホセを誘惑して逃がしてもらう。幼馴染の恋人を捨て、衛兵の職をも失うことになったホセは、カルメンのもとに走る。しかし、カルメンはホセに見向きもしない。絶望したホセはカルメンを刺し殺す。うぶなホセをからかったカルメンが悪い。純朴な若者が一途に思いつめれば、とんでもない行動に走る。なにも珍しいことではない。
　タバコ工場は現在、大学の法学部になっている。ホセがカルメンに出会った石造りのパティオ（中庭）には、談笑する学生や読書する学生が思い思いの格好で腰をおろしている。創設者だろうか？厳ある表情で立つ石像が、そんな学生たちを暖かく見守っている。

　さらに西へ歩いた私たちは、カテドラル（セビリア大聖堂）の面する大通りに出た。目ざすアルカサルはその奥にある。乾いた馬糞の匂いがかすかに漂う。馬車の御者が石畳の道路の馬糞を洗い流している。空気が乾燥しているから、こんな処理でいいのかな？
　とりあえず休憩しよう。私たちは、通りに面したオープン・カフェのテーブルについた。私はビール、Ｋ君はコーヒーを注文した。ビールのつまみに出されたオリーブの実をつまんだＫ君は、「梅干しみたいだな、いや少し小さいか、らっきょうくらいかな」などと、とぼけた発想をする。
路面電車が大通りの交差点をカーブしながら通過する。観光客を乗せた馬車の馬が脚を上げ、リズムカルなひづめの音を石畳に響かせる。御者は、手綱をさばいて馬術競技の「速足」のように馬を走らせる。街かどでは、ストリートパフォーマーがフラメンコを演じている。ここは観光スポットの真っただ中だ。

　12世紀のセビージャは、北アフリカのイスラム教徒ベルベル族が興したムラービト王朝の首都

であった。カテドラルのある場所には巨大なモスクが建立され、アルカサルのある場所には城砦があった。
　13世紀前半になると、キリスト教徒によるレコンキスタ（国土回復戦争）は勢いを増し、カスティーリャ王国のフェルナンド3世によって、コルドバやセビージャなどグアダルキビル川流域を中心とするイスラムの主要都市は征服された。ただし、グラナダには新たにナスル王朝が成立し、その後200年間存続する。
　キリスト教徒によって征服されたからといって、イラム教徒の住民はみな殺されたとか追放されたということではない。また、イスラム教のモスクはみな破壊されたということでもない。キリスト教に改宗して居残った人々もいれば、イスラム教徒のまま残留した人々もいる。また、征服したキリスト教側にしても、居残ったイスラム教徒に、その信仰を認め財産を保障した国王もいれば、厳しく弾圧した王もいる。そして征服後、イスラム教のモスクの多くはキリスト教の教会へと改修されていった。その改修工事に、居残ったイスラム教徒の建築家や職人がかかわった。こうして生まれたスペイン特有のイスラム建築様式をムデハル様式と呼ぶ。ムデハルとはキリスト教徒による征服後も、そこに留まったイスラム教徒のことである。
　1248年、セビージャは、カスティーリャ王国のフェルナンド3世によって征服され、そこにあったイスラム教徒の城砦は、王国のAlcázar（アルカサル　王城　王宮）として用いられた。そして、1350年に即位したペドロ1世は、1364年、このアルカサル内にイスラム様式の宮殿を建てた。王はイスラムの洗練された繊細な美を好んだのである。ところで、この頃の日本はというと、金閣を造営した足利義満が室町幕府3代目将軍に就任したのが1368年である。

　朱色の壁の中央に取り付けられたアーチ型の城門をくぐって、私たちは入場料を支払った。9.5ユーロだ。Ｋ君は、パスポートを持参していて、シニア料金の2ユーロで済んだ。9.5ユーロのところを2ユーロとは安すぎないか？齢を取ると世界中で優しくされるんだ。
　右側の建物に入ると「提督の間」がある。コロンブスの新大陸「発見」以来始まったアメリカや東アジアとの貿易のいっさいを取りしきる「インディアス通商院」がここに設けられていた。当時ヨーロッパ人はアジアの東部を漠然とIndias（インディアス英語はIndia）と呼び、そこに住む人々をスペイン語でIndio（インディオ　男）,India（インディア　女）と呼んだ。英語ではIndian（インディアン）と言う。したがってインディアス貿易とは、アメリカや東アジア（とくにフィリピン）との貿易を指す。
　中央の「ペドロ1世宮殿」は、ペドロ1世がイスラム職人をグラナダから呼び寄せ2年間かけて建設した。宮殿を抜けると、「乙女の中庭」に出る。長方形の池を二階建ての回廊が巡っている。大理石の細い柱が2本1組になってアーチ型の壁を支えている。壁にはアラベスク模様の透かし彫りが繊細に施されている。私はしばし回廊の日陰にたたずんだ。
　真昼の陽光がパティオ（中庭）に降り注いでいる。観光客のさざめきは聞こえない。回廊の日陰のひんやりと乾いた空気に包まれて、池の水面に跳ねてキラキラ輝く陽の光を眺めていると、なんだか懐かしい気分になってくる。

カトリックの壮大な大聖堂の内部は薄暗い。太くて長い石柱の数々と天井に届かんばかりのステンドグラスの窓、どれもこれも、ひたすら天をめざして上昇しているようで見上げる人間を圧倒する。それに比べて、イスラムの建物内の、この溢れんばかりの陽の光と穏やかさはどうだ。ここには重々しい油絵の肖像画もないし、むごたらしい磔刑図もない。キリスト教徒の国王ペドロ1世が、宮殿の造営にあたりイスラム建築様式を採用したのも無理はない。

アルカサルを出ると、カテドラルの向かいにあるArchivo General de Indias（インディアス古文書館）をのぞいた。16世紀に商品取引所として建造されたが、1781年に公文書館となり、中南米やフィリピンの植民地支配に関する貴重な文書資料が保管されている。コロンブスやマゼランそしてコルテスの自筆文書も展示されている。1987年、カテドラルとアルカサルとインディアス古文書館は三つ合わせて世界遺産に登録された。
古文書館を覗いてみたものの、文書も読めないしガイドもなしでは、ちょっとお手上げだった。理解できない展示を眺めて疲れた私たちは、オープン・カフェで昼食をとることにした。私はビール大と子牛の煮込み、Ｋ君はビール小と子豚のロースト。じっくり煮込んだ子牛はおいしい。やっぱり、旅行の醍醐味は、昼間からビールをくらって、普段食べない料理を味わうことだよな。

食事を終え、疲れをいやし気力を取り戻した私たちは、ガイドブックに載っている「フラメンコ博物館」をのぞいてみることにした。ところが地図を見ても、その場所がわかりにくい。訊ねてみると、人によって指示する方向が異なる。「博物館」と名乗っているが、公の施設ではなさそうで、地元の人々にもあまり知られていないようだ。私たちは何度か道を尋ね、「ヌエバ広場」を中心に迷路のような石畳の街路を、犬の糞を踏まないように気を配りながら歩き回った。趣のある石畳の路だが、よくよく見ると汚れていて、ときに乾いた犬の糞があるから注意が必要だ。こんなとき、（日本であれば）と言いたくなる。日本であれば、店の人がそれぞれ店の前の道路はきれいに清掃するけどな。

広場に通じる何本かの街路がある。その街路の両側には2階建ての石造りの家がぎっしり並んでいる。間口はどれも狭いが、中に入ると奥は深くて広い。おしゃれなパティオがあってびっくりすることもある。
北の街路の一角を指示されて行ってみると、そこはフラメンコ教室のあるタブラオで、「フラメンコ博物館」ではなかった。感じのいい女性スタッフが応対してくれ、フラメンコ博物館の位置を丁寧に説明してくれた。それで、ついつい、今日はここでフラメンコ鑑賞をしようということになって、チケットを購入した。ドリンク等は何もつかず18ユーロ。19：30分開演だ。

やっと「フラメンコ博物館」にたどり着いた。私たちは、衣装、靴、扇、ギター、カスタネットなどの資料や写真などを見て歩いた。展示だけでなく映像や音声による説明もある。しかし、こういうところを満喫するためには、それなりの予備知識が必要だ。私たちはヌエバ広場に戻っ

てひと休みすることにした。
　広場に面してバルが三つと売店が一つあって、売店はジュース、アイスクリーム、ポテトフライ、ポップコーンなどを販売している。二つのバルは賑わっていて、外まで人があふれテーブルはほぼ満席である。私たちはなんとか空いている椅子を確保すると、ウエイターに注文した。Beer とCoffee（「ビア」と「カフィ」）と英語風に発音した。「ビア」は通じたが「カフィ」が通じない。二人のウエイターを相手に、「カフィ」と「カ」にアクセントを置いて、わりときれいな発音で3度繰り返した。それても、二人がいぶかしげな表情で私を見つめるので、私は左の手のひらを上に向けて「受け皿」とし、右手の親指と人さし指で小さなカップの把手（とって）をつまんでエスプレッソをすすってみた。すると二人は人差し指を私に向け、声を合わせて叫んだ。”Oh, café”「オー、ヵフェー」。なるほど、「フェー」にストレス（強勢）を置くのか。やっぱり、ストレスが大切なんだ。昔、「ナポレオン」と平坦に発音してもなかなか通じなかったところ、突然相手が「Oh! ナポーレオン」とポにストレスを置いて発音したことを思いだした。しかし、このバルには、ヵフェーはおいてないという。

　私たちは、反対側のすいているバルに行って、外の椅子に腰を下ろした。こちらのバルでも、やっぱりカフェーはなかった。仕方がないのでK君は、オレンジの「オ」を強く発音してジュースを注文した。飛行機の中で、「オレンジジュース」と日本語風に平たんに発音したら通じなかったのだ。

　ひと休みをして気力を取り戻した私たちは、グアダルキビル川の Torre del Oro（トレ・デル・オロ　「黄金の塔」）を目ざして再び歩き始めた。グアダルキビル川はアンダルシアの北東から南西に650㎞横断して流れ、大西洋に注ぐ。セビージャは河口から90㎞さかのぼった内陸港で、コロンブスの新大陸「発見」以降は、インディアス貿易の拠点として飛躍的に発展した。
　1503年、セビージャに設置された「通商院」はインディアス貿易のいっさいを取りしきった。長い航海を終えてインディアスからの船団がセビージャに到着すると、大量の船荷はすぐさま通商院に運ばれ管理された。この莫大な富が「太陽の沈むことのない国」スペインの王室を資金面で支えたのである。セビージャは、またリスボンと並んでヨーロッパ最大の奴隷貿易都市でもあった。奴隷はアフリカからだけでなくアジアからも、そして日本からも運ばれてきた。

　グアダルキビル川にたどり着いた私たちは、橋の欄干にもたれかかって、穏やかな流れを見下ろした。下を通る大きな遊覧船が汽笛を鳴らす。ガイドブックを見ると、この橋はイサベル2世橋で、さらに上流に目をやると「黄金の塔」が見える。私たちは橋から堤防に降りて歩いた。
　「黄金の塔」の最上段に人がいて川や街を見下ろしている。ビルの上から見下ろす道路の人間は小さく見えるのに、道路から見上げる塔の人間は思いのほか大きく見える。なぜだろう？
　ガイドブックによると、「黄金の塔」は、13世紀、イスラム教徒が防備のために建設した正12角形の塔で、かつては塔の上部が黄金の陶板で覆われ輝いていたそうだ。当初は対岸にも「銀の塔」があり、両塔の間を太い鎖で結び、昼間は鎖を川底に沈めて船を通し、夜間は鎖を水面

に出して敵の侵入を防いだとのことである。
　塔の中は博物館になっていて、化粧した若者が受付をしていた。ゲイかな？3ユーロだと言うので、カウンターに2ユーロ硬貨と1ユーロ硬貨をのせて、Ｋ君と二人で入ろうとすると、「アッ」と口に手をやる。”For one person?”「一人分か？」と言うと、にっこり笑って ”Yes” とうなずいた。
　らせん状の階段を上(のぼって)って最上段に出ると、空は抜けるように青い。見渡す限り雲ひとつない。風もなく、川の水はゆったり流れている。流れる先は大西洋である。
　1614年秋、つまり400年前のことである。日本の武士が、この川をさかのぼってセビージャにやってきた。
　1613年10月28日、仙台を出航した支倉常長一行は、3か月かけて太平洋を横断し、スペイン領メキシコに到着した。このとき、常長は42歳だった。それから、大西洋を横断するとグアダルキビル川をさかのぼって、ここセビージャまでやって来たのである。日本人一行は20名ほどで、日本を出てからまる1年が過ぎていた。船に立ち黄金の塔を仰ぎ見た彼らは、何を感じ何を考えていたのだろうか？

　1543年のいわゆる「種子島の鉄砲伝来」以来、ポルトガル人やスペイン人、オランダ人が九州や江戸に来航し貿易を始めたが、貿易相手の幕府や大名の利益も莫大なものだった。東北一の有力大名で、天下を取ったばかりの家康にも対抗しうる実力を有した仙台藩主伊達政宗は、仙台にも外国船を呼び寄せたいと考えていた。
　大分、大阪、江戸で布教活動をしていたフランシスコ会の宣教師ソテロは、そんな政宗に接近して提案した。スペイン領メキシコと直接貿易すればいい。ソテロ神父は布教活動の拠点を江戸や大坂から仙台に移そうと考えていた。江戸や大坂では、布教禁止の動きが徐々に広がりつつあった。
　スペインの東アジア貿易は、スペイン領フィリピンのマニラ総督がとりしきっていた。メキシコもマニラ経由で東アジアと貿易していた。支倉常長は、メキシコと仙台の直接貿易を求める伊達政宗の要望書を持参したが、スペインのメキシコ総督はマニラに遠慮して承諾しなかった。苦労して太平洋を渡り、はるばるメキシコまでやって来たのに、支倉常長は、主君伊達政宗に託された目的を果たすことができなかったのである。
　ソテロ神父は、それならばと、スペイン国王に直訴するよう支倉常長を誘った。ソテロ自身も、日本における布教活動の成果を国王や教皇に直接報告し、宣教師のさらなる派遣を訴えたいと考えていた。
　気を取り直して、メキシコから大西洋を渡った支倉一行は、ソテロ神父の故郷であるセビージャに上陸し歓迎されたという。続いてマドリッドに入ると、常長は国王専属の司祭から洗礼を受けた。真の信仰心からの洗礼だったのか、それとも任務を成功に導くための「苦渋の決断」であったのかどうか、それはわからない。
　フェリペ3世は謁見(えっけん)を許したものの、日本における布教活動の持続・拡大というソテロ神父の要請にも、メキシコと仙台との直接貿易を求める伊達政宗の要請にも許可を与えることはなか

った。
　当時カトリックの各会派の間には激しい対立があり、ソテロの考えに反対する勢力は強く、日本では宣教師に対する弾圧が日増しに厳しくなり、もはや宣教師の派遣は危険だと訴えた。
　その後、ソテロ神父と支倉一行はローマに行って教皇に拝謁(はいえつ)した。1615年11月3日のことである。ローマの記録に残っている。しかし、ここでも支倉は成果をあげられず、ソテロも望んでいた日本の司教職に任命されなかった。
　それでも支倉一行は、色よい返事を待って1617年夏までスペインに留まっていたが、事態は好転しなかった。成果を何もあげられず、失意の支倉一行は帰国の途についた。大西洋を渡ってメキシコへ着き、メキシコからフィリピンのマニラに行った。帰国は許されず、徳川幕府から「追って通知があるまでマニラに留まるよう」命令されていたのである。
　1620年、ソテロ神父はカトリック教会の命令でメキシコに戻り、支倉一行はついに帰国を許可された。しかし、帰ってみれば、故国日本は出発した時とは様変わりしていた。家康は、４年前に75歳で亡くなっていた。家康の存命中は、貿易のためにキリスト教の布教は黙認していたが、家康死後、将軍秀忠はキリスト教禁止を徹底するため貿易を制限した。
　帰国2年後、支倉常長は51歳で死んだ。死因は不明である。切腹を命ぜられたのではないか、という憶測もある。マドリッドで洗礼を受けた常長が、帰国後、棄教したのかどうかも不明である。常長が死んだ1622年、幕府は長崎で宣教師25人を火刑にし、その前で信者30人を斬首した。いわゆる「長崎の大殉教」である。同年、ソテロ神父は弾圧に苦しむ日本の信者を放ってはおけぬと、ひそかに日本に潜入した。しかし、その2年後、捕えられて処刑される。
　常長は、任務を遂行するにあたって、その任務のなりゆきを記録にとっていたはずである。でなければ、帰国後報告できない。つまり1613年10月28日、仙台を出航したその日から日記をつけていたはずである。しかし、この日記はもとより、常長の任務にかかわる日本側の資料は、いっさい残っていない。紛失したのか処分されたのか、それもわからない。

　2012年4月11日の読売新聞に「ハポンさん　DNA 鑑定」という記事が載った。「江戸時代初期に渡欧したサムライの末裔(まつえい)ではないかと言われる「ハポン」の姓を持つスペイン人の DNA 鑑定を行い、日本との関係を探る研究プロジェクトが近く始まる。スペイン語で『日本』を意味する『ハポン』姓を持つ人は、スペイン南部セビリア近郊の町コリア・デル・ソルとその周辺に約800人住んでいる。サムライの末裔と言われるのは、①慶長遣欧使節が同町に一時滞在した。②古文書に『ハポン』姓が出現するのは、一行が去ってから数十年後から・・・などの理由からだ」
　英語の japan は「ジャパン」だが、スペイン語の Japón は「ハポン」と発音する。Ja ji ju je jo はスペイン語の場合「ハ」「ヒ」「フ」「へ」「ホ」と発音する。
　Coria del Rio「コリア・デル・リオ」はセビージャから15キロ下流に位置する小さな港町で、当時セビージャに入る船は手前のコリアに接岸して通関手続きをすることになっていた。スペインを離れる際の手続きもここで行われたのだろう。任務を果たせず、失意のうちに帰国の途についた支倉一行がこの港に立ち寄ったとき、一行のうち数名がコリアに留まり、のち現地の女性と

結婚してこの地で生涯を閉じた。その子孫が「ハポン」姓を持つ人々だという説があるのだ。
　支倉一行は宣教師たちから、出国後の日本の情勢について知らされていただろう。日本では、キリスト教はご法度となり厳しく処罰されている。メキシコやスペインで洗礼を受けキリシタンとなった自分たちは、この先どうなるのだろうか？と不安にかられたに違いない。帰国して棄教を迫られるよりは、あるいは親戚縁者に災いが及ぶのを避けるために、と帰国をあきらめる者が出たとしてもおかしくはない。
　興味深い話だが、このDNA鑑定の結果についての記事は、新聞記事が出てから3年余が過ぎるのに、今のところない。なぜだろう？
　なお、コリアは支倉常長の墓がある宮城県大郷町と姉妹都市提携を結んでおり、川沿いの公園には宮城県から寄贈された支倉常長の像が立っているそうだ。

　黄金の塔から円形のアリーナが見えた。Ｋ君が言った。
「闘牛場じゃないか？」
　私たちは、その方角に向かって歩いた。やはり闘牛場だった。中へ入ると、すでに数組のグループが開場を待っていた。せっかくスペインまで来たのだから、闘牛を見てもいいかなという考えがちらっとよぎった。しかし、やっぱり、残酷なショーは見たくないなと思った。

　ガイドブックによれば、闘牛は一日６回行われる。つまり１日６頭の牛が殺される。そして、１回の闘牛に最低30分はかける。闘牛士は数名いて役割分担がある。まず１番手の闘牛士が、派手なケープで牛の注意をひきつけては、突進してくる牛をかわす。これを繰り返して牛を疲れさせる。次に、馬に乗ったピカドールが、槍で首筋を突いて牛の力を弱める。続いて２番手の闘牛士たちが、突進する牛の背中に小さな槍を突きたて、素早く身をかわす。そして、最後、赤い布と剣を手にしたマタドールと呼ばれる主役の闘牛士が登場し、何度も牛をかわしながらとどめの剣を突き立てる。

　みんなで寄ってたかって１頭の牛をなぶり殺しにする、しかもそれを見世物にする。残酷なショーで、あまり見たくない。しかし、これは、スペインの人々が長年かけて創り上げてきた「固有の文化」であり、伝統文化である。それを「やめろ！」と否定することはできない。第一、私は牛肉を食べる。だから、牛を殺すな、とは言えない。殺すのはやむを得ないが残虐な殺し方をするな、と言うことはできるかもしれないが、そんなの偽善だよ、そもそも生きようとする牛を殺すこと自体が残虐なんだ、と言われればそれまでだ。
　カタルーニャ自治州では、2012年から闘牛が廃止されたそうだ。動物愛護の観点から世界的に批判が高まっているからだ。しかし、闘牛を非難する考えに反対したり批判したりする人も多い。闘牛は立派な芸術である、ピカソも愛したではないか、ゴヤも数々描いたではないか、闘牛が嫌いな人は見なければいいだけのことだ、と主張する人も少なくない。

　和歌山県太地町で伝統的に行われてきたイルカの追い込み漁が欧米諸国から非難されている。

太地町だけではない。この漁で生け捕りにされたイルカを購入している水族館も非難される。そして、この伝統的なイルカの追い込み漁をやめさせようと、さまざまな圧力が加えられている。このイルカの追い込み漁がなぜ残酷なのか、私には理解できない。
　それでは、犬食文化はどうか。日本人はクジラを食べるが、犬は食べない。犬を食べるなんてとんでもない、想像するのもおぞましいと私も思う。しかし、中国人や韓国人は犬を食べる。民族によって食文化は異なる。人間は誰でも、自分たちが常食しないものを食べることには違和感を感じ、拒否反応を示す。しかし、これは善悪とか優劣とは異なることであり、混同してはならない。クジラを食べることが残酷で、クジラを食べる民族が劣っているわけでもない。犬食についても同じ事である。お互い、異なる食文化を認め、尊重し合わなければ争いが生じる。

　私たちは Plaza Nueva（プラサ・ヌエバ　「新しい広場」）まで歩いて戻ると、フラメンコ鑑賞をすることになっているタブラオの隣のバルまで行って、外のテーブルの椅子に腰を下ろした。中年のウエイターが、苦虫を噛み潰したような表情で注文を取りに来た。メニューを見ると、Arroz negro para 2 personas　（アロス・ネグロ、パラ、ドス・ペルソナス「イカ墨ご飯、２人前から」）とある。”For only two?”「２人前だけ？１人前はないのかと」と確認すると不愛想に答えた。
“Just for two. It takes 20 minutes.”
「２人前だけだ。20分かかるぞ」
　私はＫ君を誘った。
「イカ墨ご飯を食べてみないか？結構いけるよ」
Arroz negro（アロス　ネグロ　黒いご飯）は、見た目も悪いしネーミングは最悪だ。しかし、イカ墨のコクと甘みが口に広がり、とてもおいしい。スペインへ来たら、これを食べなきゃ。

　日本にも「タコ飯」とか「イカ飯」というのがある。「タコ飯」は茹タコに味付けをして炊き込みご飯にしたものだ。「イカ飯」は茹でたイカの胴体にもち米を詰めたものだ。しかし、「アロス・ネグロ」にはイカの切り身は入っていない。具は何もない。ただ、つややかな黒いライスがあるだけである。そういう点では、まさに「黒い飯」なのだ。それにしてもこのネーミングはストレートすぎないか？
「スペイン語は表現がストレートというか、単純明快なところがあってね」
　アロス・ネグロの出来上がるのを待って、私たちはビールのグラスを片手に、「突き出し」のオリーブの実をかじった。私は、スペイン語の単純明快な表現について論じた。
　「例えば、コース料理で、前菜は De primero（デ、プリメーロ『1番目の（料理）』）、メインディッシュは De segundo（デ、セグンド『2番目の（料理）』）、デザートは De postre（デ、ポストレ『（食事）の後』）というんだよ」
「へぇー」
ビールを味わいながら、私は続けた。
「スペイン語の母音は、日本語と同じアイウエオの五つでね、母音で終わる単語も多い。だから

、意味は全く別なんだけれど、発音が同じ面白い単語があるんだ。『バカ』『トロ』『アホ』ってね」
「冗談だろ？」
「ほんとだよ。vaca（バカ）はビーフ、牝牛。toro（トロ）は雄牛、闘牛。ajo（アホ）はニンニク。それにダメ（da me）もあって、これは『私にください』という意味だよ」

　不愛想な中年のウエイターがアロス・ネグロを鍋ごと持ってきた。不器用な手つきでしゃもじを扱い、鍋から黒い飯を掬い取ると二人の前の取り皿に盛りつける。結構な分量だが、鍋にはまだ一人前くらい残っている。私は黒飯を頬張るＫ君に同意を求めた。
「どう？うまいだろ」
「うん、うまいけれど、食べきれないな」
　食べ終わると、空のペットボトルをウエイターに見せて頼んだ。
” Two bottles of water, please.”
「ペットボトルの水2本ください」
“We don’t have bottles of water.”
「置いてない」と答えてから、ちょっと間をおいて空のペットボトルを指さした。
“I can put water in your bottles.”
「その空のボトルに水を入れてやろうか？」
　一瞬、ここの水は大丈夫かな？と思ったけれど、”Thank you, please” と反射的に答えた。スペインは水が豊富だから、まあ大丈夫だろう。それにしても、このウエイター、案外いいところあるじゃん。不愛想ではなくて、渋い表情だというべきだったか。代金を支払って、礼を言うと、ニコッと笑顔を向けてくれた。

　タブラオの舞台の前の客席は、すでに満席だった。舞台も狭いし、客席も少ない。私たちは、舞台から外れた横の席に腰をおろした。
　やがて時間が来て、ギタリスタとカンタオール（歌い手）が登場し、弦をかき鳴らし、手拍子をして靴を踏み鳴らす。中年のカンタオールがしわがれた声を張りあげる。すると舞台のそでからバイラオーラ（女性の踊り手）が現れる。踊り手は女性がひとり、男性がひとりだった。総じて、「ガリョス」のほうがよかったが、ここでは、若い男性の踊り手のタップダンスが素晴らしかった。いかにも引き締まった細身をダイナミックに躍動させて情熱的に踊った。

　タブラオを出た私たちは、タクシーを拾ってホテルに戻った。一風呂浴びてから、私はホテルのバルに出かけ、今日一日をビールでしめた。

20日（土）グラナダ　アルハンブラ宮殿

　がっちりと朝食をすませてから、タクシーでセビージャ駅に行った。８時30過ぎである。ガイドブックによると、セビージャからグラナダまでは列車で約３時間だから昼頃には着くだろう。
　予約したアルハンブラ宮殿の見学は午後の部で２時から、ナスル宮殿への入場は３時30分からになっている。ナスル宮殿の場合は予約の時間帯にしか入場できないので注意が必要とのことだ。

　窓口で切符を求めた。グラナダまで、と言うと、窓口の女性は、「え、グラナダ？」と、なにやら不思議そうな表情をした。パソコンの画面を操作してから私のほうを向いて言った。
“The next train won’t be until 11:30”
「次は、11時55までありません」
“Ha? Really? …..What time does it arrive?”
「えっ？本当？・・・その列車は何時に着くの？」
“At 15:05.”
「3時5分です」
　うそー、いったいどういうこと？９時台と10時台は一本もないの？
“Any other way?”
「ほかに方法は？」
　コルドバ経由をチェックしてくれたが満席だった。長距離列車は、すべて座席指定で日本のように自由席というのはない。どうしますか？と言われて、しかたないかと11時55分発の切符を２枚購入した。

　私とＫ君は、まだ朝早く閑散とした駅構内のベンチに腰を下ろすと、あれこれ話し合った。３時５分着でアルハンブラの予約に間に合うかな。たぶん無理。タクシーを飛ばせば間に合う かな。その場合、このスーツケースはどうする。まあ、ナスル宮殿内の見学はあきらめて、ホテルでのんびりしてから、グラナダの街を散策しようか。アルハンブラもナスル宮殿以外なら夜８時まで OK のようだから、無理はしないで、のんびりやろうか、ということになった。
　Ｋ君は一服するため駅の外へ出た。私はガイドブックをぱらぱらめくっていた。巻末の「鉄道の旅」の後に「バスの旅」という項目があって、「地方はバスが便利」と書いてある。
（そうか、バスだ）
　なんとなく、バスの長距離移動は疲れるし危ない、列車のほうが速くて安全、それに旅情をそそる、というようなイメージがあって、バスについては検討していなかった。
　Ｋ君が、ガックリした様子で戻ってきた。
「駅のまわりには何にもないな」
「バスで行こう。切符を払い戻してくる」
「え？払い戻してくれるかな。トレドはダメだったじゃない」

「あの時は、列車が出た後だったから、今回は出発前だから大丈夫だろう」
　私は考えた。「払い戻し」ってなんて言うのかな、まあ、cancel「取り消す」で通じるだろう。

“I’ m going by bus, I want to cancel these tickets, please.”
「バスで行くことにした。この切符をキャンセルしたい」
　窓口の中年男性は、ひとつため息をつくと、やれやれといった表情で画面を操作した。それから、お金を取り出して数えると、まず札を窓口に向かってポイと投げ、次にいくつかの硬貨を指先で押し出した。（もっと優しくしてよ）と思ったが、ヨーロッパでは、店や窓口で客にお釣りを渡す場合、無造作に投げてよこすのは珍しいことではない。悪意はないんだ。それとも私の英語がぞんざいで、ちょっとムカついたのかもしれない。
　急いで、駅の外に待機するタクシーに乗ると運転手に告げた。
“To the bus terminal. We are in a hurry, please!”
「バスターミナルまで、急いでいるんだ」
“・・・・・・？”
（えっ通じない？うそー？）
“Voy a Granada. Autobus!”（ボイ、ア、グラナダ、アウトブス）
「グラナダへ行くんだ。バスだよ」
“Estación del autbúses?”（エスタシオン、デラウトブス？）
「バスステーションですか？」
　そうか、Estación か、Bus station と言えばいいんだ。
　クルマを発車させると、若い運転手は、
“No English. Only Spanish”
「英語はダメ。スペイン語だけ」と自嘲気味に謝った。

　バスステーションの構内に入ると、窓口に10人ほどの列が一つあって、手前のもう一つの窓口には２人いる。（こっちだな）、私たちは急いで長い列の後ろについた。すると、横のベンチに腰かけていたTシャツと半ズボン姿の体のでかい兄ちゃんが、立ち上がって何やらまくしたてた。「並んでいるんだ。オレが列の最後だ」ということらしい。二の腕にはタトゥーがいれてある。私は英語で言った。まあ、雰囲気でわかるだろう。
”OH, you are the last in line?”
「あんたが列の最後かい？」
「そうだよ。俺の後につきな」というふうに兄ちゃんは私たちの前に並んだ。その兄ちゃんと親しげに喋っていたもう一人の若者が緑のベストを身につけた駅のスタッフだったので確認した。
“Para Granada?”（パラ　グラナダ？）
「グラナダ行はこの列でいいのかい？」
　そのスタッフがうなずいたので、私たちはタトゥーの兄ちゃんの後に並んだ。電光掲示板を見ると「グラナダ行　11時15分」とある。しかし、10時台にグラナダ行はない。バスでもやはりグ

ラナダ行は少ないのだ。11時15分発のバスでは、間に合わないだろうな。だって、バスは鉄道より遅いだろう。

　セビージャからグラナダへ移動するというスケジュールに無理があったのかもしれない。パッケージ・ツアーならこんな旅程は組まないだろう。コルドバからグラナダ、あるいはマラガからグラナダという旅程ならスムーズに移動できる。
　私は、コルドバ訪問をスケジュールから外したうえ、帰りのマドリッドまでの電車の時間を考えて、セビージャからグラナダ、グラナダからマラガとした。マラガまでは高速鉄道 AVE が走っているが、グラナダにはつながっていない。ガイドブックによれば、マラガからマドリッドまで２時間30分。グラナダからマドリッドまで４時間30分とある。
　タトゥーの兄ちゃんが切符を購入して列を離れ、私の順番がきた。”Granada Two”と言うと窓口の女性は「この窓口ではない」と言って何やら指示した。私は、大きな声で訊いた。
¿Que ventana ?（ケ、ベンタナ？）
「えっ？どの窓口？）
　すると私の後ろに並んでいる数人の客が叫んだ。
“Primera! Primera! La primera ventana !（プリメーラ！　プリメーラ、ベンタナ！）
（えっ・プリメーラ？プリメーラって？あっ、一番窓口か）
　私は、あわてて１番窓口に並んだ。私は呆れてＫ君に言った。
「いい加減だなあ、あいつら」
　タトゥーの兄ちゃんはともかく、あの緑のベストは駅のスタッフだろうに。
「スタッフだよな。ひどいな」

　購入した切符を見ると、”Hora de salida 11:15”（オラ、デ、サリダ　出発時刻11：15）とあるが、到着時刻が書いてない。電車の切符には到着時刻も書いてあったのになぜだろう。バスも全席指定だが、荷物検査はなかった。
　時間がきて、プラットホームにバスが着き運転手が降りてきた。私は切符を見せて訊いた。
“¿A que hora llegamos?”（ア、ケ、オラ、ジェガモス？）
「到着は何時ですか？」
“A trees. Three”（ア、トレス）
「３時だ」
　運転手はスペイン語のあとに英語を付け加えた。３時か、やっぱり、でも仕方ない。もう諦めよう。

　セビージャの街を抜けると、バスは速度を上げて順調に走り続けた。１時間もすると風景が変わった。車の両側には、見渡す限り、ゆるやかに起伏するオリーブ畑と牧草地が広がり、時折、赤茶けた岩肌が覗(のぞ)く。真昼の青空に小さな白い雲が浮かんでいる。マドリッドでもセビージャでも毎日が雲一つない青空だったから、久しぶりに小さな純白の雲を見て心が和(なご)む。さらに１時

間も走り続けると、前方かなたに高い山並みが現れた。山の上には白雲がわいている。隣のＫ君がつぶやいた。
「あの頂上付近の山肌の白いものは何だろう。家かな？」
「万年雪じゃないかな。シェラネバダといって、シェラは山脈、ネバダは雪という意味だってガイドブックに書いてあるよ」
　3000ｍを超える峰をいくつも有するシェラネバダを背景に、夕日に映えるアルハンブラ宮殿の写真がガイドブックに載っていた。

　やがてバスは町の中へと入っていく。立て看板にはグラナダの文字も見える。
「あれ？着いたのかな？」
　しかし、時計はまだ２時半だ。半信半疑で前方を注視しているとバス・ステーションらしきものが見えてきた。私はＫ君の肩をたたいた。
「着いたんだ。２時半だけど着いたんだよ。アルハンブラに間に合うよ！」
　運転手は、３時着だと言ったから30分前に着いたことになる。ノンストップのバスだから予定より早く着いても問題ない、早い到着なら誰も文句は言わない。

　私たちはスタンバイしていたタクシーに乗り込み、ホテルに急いだ。チェックインをすますと部屋に荷物を置いて、ホテルの外に出た。イライラしながらタクシーを待つ、私たちの前に客は一組いた。彼らが乗り込むとまもなく、次のタクシーがやってきた。すると横から数人連れが現れて、止まったクルマのドアに手をかけた。
“It’s our turn.”
「オレたちの番だよ」
　と、私が強い口調で言うと、ドアに手をかけた男は不審そうに振りむいた。温厚そうな普通のサラリーマンだったから、（あれっ違うかな？）と一瞬思ったが、時間がない、迷わず乗り込んだ。セビージャのバス・ステーションでタトゥーの兄ちゃんがベンチに座って待っていたように、あの人たちもまた、後ろの席に腰かけて待っていたのかな？もしそうなら、ごめんね。急いでいるんだ。
　アルハンブラ宮殿への坂道を上るタクシーの運転手に私は言った。
“A Generalize”「ヘネラリーフェまで行って」
「着いた！」
「急げ！」
　タクシーを降りて、チケット売り場の行列の横から中に入ろうとする私たちを、ショットガンを手にした警備員が阻止する。私は警備員の横に立つスタッフに、我が家でプリントアウトした「ナスル宮殿見学」の予約番号を記したバウチャーを見せて叫んだ。
”I want to change this into tickets.”
「これをチケットと取り換えるんだ」
“Do you have the same credit card?”

「同じクレジットカードを持っているか？」
Yesと言うと、そのスタッフは右上の方向を指さして何やら言った。私がわからないといった表情を見せると
”Come this way.”
「ついて来い」
　と、言って歩きだした。数メートル先の部屋に、自動発券機が数台置いてある。そのスタッフは、私からクレジットカードを受け取ると、もう一度
”The same card?”
「同じカードだね？」
　と確認してから自動発券機に差し込んだ。
”That’s all.”
「これでおしまい」
　彼は、私たちを振り向いて、にっこり笑った。すると、発券機は2枚のチケットを吐き出した。いや、驚いた。日本の我が家のパソコンで予約した入場券が、アルハンブラ宮殿の自動発券機にカードを差し込むだけで、ちゃんと出てくるんだ。不思議な気がすると同時に感激した。

　私たちは急いだ。案内板には「ナスル宮殿まで20分」とある。ともかく中は広いんだ。あと15分しかない。前を歩く大勢の観光客を走って追い抜いた。そして、ナスル宮殿入場の予約時間 15：30 の数分前に、私たちは、入口前の行列に並ぶことができた。
（間に合った！）
　私はハンカチを取り出して額の汗を拭(ぬぐ)った。

　見学は「メスアルの間」から始まる。ここは王が政務を執(と)り行った部屋で、壁面や天井は漆喰(しっくい)細工の極めて精緻な浮き彫りで装飾されている。その見事な職人技に感嘆しながら、順路に沿って進んだ。「メスアルの間」を過ぎると、大理石を敷き詰めた小さなパティオ（中庭）があって、中央に置かれた小さな水盤から水が湧き出ている。なんだか、ほっとする。建物の日陰から光あふれるパティオに出て、空を見上げると、四方の建物で四角に切りとられた青空から陽光が降り注ぐ。

　コマレス宮殿は「アラヤネスのパティオ」を囲んで建てられている。パティオの中央には長方形の池があって、その周りをアラヤネス（天人花）の生け垣で囲んでいる。池の水面にはコマレスの塔が鮮明に映っている。鏡湖池に映る金閣寺と同じ効果だ。パティオは回廊で囲まれ、アーチ型の壁を優美な大理石の柱が支えている。
　なるほど、このパティオのつくりは、セビージャのアルカサルで見た「乙女のパティオ」と全く同じだ。パティオの北側に「大使の間」がある。ここには玉座が置かれ、公式の「謁見の間」として使われていたそうだ。
　宮殿の北側の窓からは、ダーロ川を挟んで北の斜面にアルバイシンの街並を見下ろすことがで

きる。アルバイシンは城砦都市で、グラナダ陥落の時、イスラム教徒のアラビア人がキリスト教徒の総攻撃に激しく抵抗したところだという。
　アルハンブラ見学のハイライトは、Patio de los Leones （パティオ、デ、ロス、レオネス　「ライオンのパティオ」）だ。ここは王のハーレムで、王以外の男性は立ち入り禁止だった、というのが一般的な説である。庭の中央には噴水が置かれ、12頭のライオンが大きな水盤を支えているが、そのライオンの口からも水がほとばしる仕掛けになっている。噴水の水は、この庭を取り囲む四方の部屋に流れ込むように水路が作ってある。庭を囲む部屋の前の回廊には、優美な大理石の柱が無数めぐらされ、壁や天井には一面びっしりと精緻な幾何学文様の装飾が施されている。

　ナスル宮殿を出た私たちは、夏の離宮ヘネラリーフェ（Generalife）を目ざして坂を上った。ガイドブックには、王宮の東へ徒歩10分とある。
　ここには、建設当初のものはあまり残されていないそうだが、庭木と水をふんだんに使った庭園は、日本庭園にも共通するせいか、安堵感と懐かしさを感じさせる。そして何と言っても、眺望がすばらしい。正面のアルハンブラ宮殿群とその先に広がるグラナダ市街、少し北に目をやればダーロ峡谷とアルバイシンの街並みが見渡せる。

　せっかくだから、「カルロス５世の宮殿」も見なければ、と私たちヘネラリーフェを出た。
ぐるっと回って「カルロス５世の宮殿」に引き返すと、宮殿の手前に２階建ての小さなホテルがあって、その前に Bar（バル）と看板がある。私たちは迷わず中へ入った。奥には涼しげな小さなパティオあって、そこがバルになっている。４つあるテーブルのひとつがあいている。私はビール、Ｋ君はカフェ・ソロを注文した。つまみにフライドポテトでもないかとウエイターに訊くと、ポテトはないがケーキはどうだと言われた。
（ビールにケーキはムリでしょ？）
　おかしなバルだ。でもまあパティオそのものは悪くない。
勘定を支払って出ようとすると、”Where are you from?”「どちらからですか？」と訊く、”From Japan”と答えると ”Nice”「いいところですね」と言ってくれた。

　難攻不落のアルハンブラ城は、1491年春、カトリック軍によって包囲され攻撃されたが、籠城してよく耐えた。しかし、城内の窮乏は限界をむかえ、1492年１月ついに、ナスル王朝最後の王ムハンマド11世は、「カトリック両王」イサベルとフェルナンドに降伏した。
　王は、アルハンブラ宮殿を明け渡すと一族や家臣とともに落ちのびていった。つまり、アルハンブラは無血開城されたのである。王侯一族が落ちのびて行った先は、南西20キロに位置する荒地で、そこを新たな領地とすることを認められたのである。途中、アルバハラスの丘で馬を止めると、王は振り返ってグラナダを見つめハラハラと涙をこぼしたという。この丘を下れば、グラナダを見ることは永遠にないのだ。
　カルロス５世は、グラナダ王国を滅ぼしレコンキスタを終了させた「カトリック両王」の孫で

ある。スペイン王としては「カルロス１世」で、当時スペインは、ヨーロッパ中部、現在のドイツあたりの「神聖ローマ帝国」の王位も継いでいたので、その神聖ローマ帝国の王としては「カルロス５世」となる。
　新婚旅行でグラナダを訪れ、半年ほどアルハンブラ宮殿に滞在したカルロス５世は、イスラム建築様式の宮殿の芸術的価値に感嘆しつつも、祖父母が成し遂げた「異教徒征服」という偉業を讃える建築物も残さなければならぬと考えた。そこで彼は、アルハンブラ宮殿の隣というか手前に巨大なルネサンス様式の王宮を建設したのだ。
　この行為に対し、後世の人々の間には賛否両論ある。異質で無骨な建物をこんなところに建ててアルハンブラ全体の調和をぶち壊した。いや、勝者でありながら異教徒の宮殿を破壊することなく残したうえで、新たな宮殿をつけ加えたのだから賢明な判断だ。

　受付の若い女性が私たちを見て訊ねた。
”Where are you from?”
「どちらからですか？」
“Somos de Japón”（ソモス、デ、ハポン）
「日本からです」
　私はスペイン語で言ってみた。すると彼女は、にっこり笑って入場券を手渡すと、完璧な日本語で応じた。
「ようこそいらっしゃいました。ここの入場は無料です。どうぞごゆっくり見学して下さい」
　Ｋ君がびっくりして言った。
「あれ？日本語、上手ですね」
「いえ、まだまだです」
　この「まだまだです」というフレーズは、外国人が教えられている「日本語会話」の決まり文句かな？以前、「あなた、日本語上手だね」と外国人を褒めたときも、「まだまだです」という全く同じフレーズが返ってきた。
　展示は、アルハンブラ宮殿の素晴らしさを映像で紹介するもので、「カトリック両王」の異教徒征服を誇示するような内容はなかった。
　帰るとき受付嬢に、「どうもありがとうございました」と日本語で礼を言うと、やっぱり完璧な日本語が返ってきた。
「どういたしまして、また来てください。ありがとうございました」

　気分を良くした私たちは、タクシーを拾ってホテルまで戻った。お腹がすいた。朝食はしっかりとったものの、それから何も食べていない。今はもう６時過ぎである。ホテルの近くをぶらぶら歩いていると Restaurante Itariano（レスタウランテ・イタリアノ）の看板が目についた。店の外のテーブルは賑わっている。美人で感じのいいウエイトレスが、たった一人で、いくつかのテーブルを行き来して多くの客の注文をさばいている。
　空いているテーブルにつくと、ウエイトレスが注文を取りに来たので、スペイン語のフレーズ

を思い出しながら言ってみた。
“Hola! ¿Puedo comer?”（オラ、プエド、コメール？）
「こんにちは、食事できる？」
“Todavía no.”（トダビア、ノ）
「まだです」
¿A que hola?（アケオラ）
「いつからなの？」
“ Desde ocho.”（デスデ、オチョ）
「8時からです」
　やっぱりね。スペインのレストランは、夕飯は８時からなんだ。「郷に入れば郷に従え」と言うけれど、夕飯が８時以降というのはムリだな。

　朝食は７時頃、仕事は午前が８時から12時まで、昼休みは12時から13時まで、午後の勤務は17時まで、夕飯は家に帰ってだいたい７時くらい。こんな生活リズムで、今までずうーと生きてきたので、昼食は2時から３時の間とか、夕飯は９時頃だと言われても、戸惑うばかりで、身体がついていかない。

　ガイドブックには、「スペイン人は１日５回食事するといわれる」とある。①朝食（パンとコーヒーで軽く）②11時頃（バルで軽いつまみ）③昼食（２時～３時半、１日の食事のメインでフルコース、食前の一杯も欠かさず）④仕事帰り（バルで１杯ひっかけつまむ）⑤夕食（⑩時過ぎに軽く）、そして「スペイン人は食事の間に仕事をする、などと揶揄（やゆ）される」と書いてある。

　しかし、いくら伝統文化とはいえ、こんな生活リズムでは、競争の厳しい現代の市場経済で生き残れないだろう。ＥＵに加盟してからは、「スペイン人はもっと働け」と勤勉なドイツ人に叱られてしまう。だから、バルセロナやマドリッドなどの都会では、昼休みを短くして勤務時間をアルプス以北のヨーロッパ諸国に合わせているとのことだ。

　なるほど、と私は気がついた。スペイン語では、朝の挨拶を Buenos días!（ブエノス、ディアス）といって、午後２時頃まではこれでよいとテキストに書いてある。朝の挨拶が２時までって、どういうこと？スペインでは午後２時まで朝なの？と最初は思ったが、これは違う。

　「ブエノス、ディアス」の意味は英語でいうと Good morning ではない。Have a nice day!　（良い一日でありますように）だ。２時頃までなら「よい一日でありますように」でいいけれど、２時過ぎだと、一日の半分はもう終わっているから、この表現は使いにくい。だから、２時以降９時頃まで、つまり夕食までは、Buenas tardes!（ブエナス、タルデス　tarde は午後、夕方）。そして、９時以降はBuenas noches（ブエナス、ノチェス　noche は夜）となる。なるほど、しかし、イタリア語もフランス語も朝の挨拶は「よい１日でありますように」だから、地中海世界

の人々の生活リズムは、もともとはみな同じだったのかもしれない。
　そして、もう一つ気がついた。ホテルの朝食があんなにも量が多くて種類も豊富なのは、外国からの観光客に対して、「たくさん食べて、２時までもたせなさい」ということなのかもしれない。

　フライドポテトをつまみながら、私はビールの大を飲み、Ｋ君はビール小で８時まで我慢することにした。それから私たちは、感じのいいウエイトレスに、「王室礼拝堂」（Capilla Real カピジャ・レアル）の位置をガイドブックの地図で確認してもらった。
　「カトリック両王」という称号は、異教徒からグラナダを「奪還」した功績によって、イサベル女王とフェルディナンド王にローマ教皇から与えられたものである。そして、ふたりは、自身の埋葬地を古都トレドではなくグラナダに指定した。
「カトリック両王」の骸（むくろ）の入った棺は床下の部屋の中にあって、観光客はひとりずつ順序よく階段を降りてガラス戸越しに中の棺を覗き見る。見た後は、そのまま前の階段を上って反対側の床に出るようになっている。ふーむ、500年前の骸は棺の中でどうなっているんだろう？などと想像したくはないな。
それから、私たちは隣のカテドラルも見学した。入り口には物乞いの男が、出はいりする観光客にむかって無言で手を差し出す。
　教会の薄暗い内部の壁に、イエスの磔刑（たっけい）図がある。イエスは、両手、両足を太い釘で十字架に打ちつけられ、そのまま放置された。自身の体重の重みで肩は脱臼し内臓は圧迫されて呼吸困難に陥り、やがて死に至る。残酷極まりない刑である。それにしても、この磔刑図のイエスは血だらけだ。顔にも身体にも点々と血痕がつけてある。右の乳の下の切り傷は、磔刑の数日後、死んでいるかどうかを確認するためにつけられる傷だそうだ。
「イエスの顔や身体の血痕が、少し多すぎないか？」
　私が、同意を求めると、Ｋ君はさらりと言う。
「人間の罪深さを強調するためだよ」

　８時になったので、私たちはイタリアレストランに戻った。あのウエイトレスは、相かわらず、テーブルの間を動き回って、かいがいしく働いている。
「ウエイトレスひとりじゃ大変だよな」
「一生懸命働いていて好感が持てるね。美人だし」
　Ｋ君はピッツアとコーヒー、私はビールと「黒飯」を注文した。イタリアンの「黒飯」はオリーブオイルで炒めたライスの頂上にイカ墨ソースが上品にのっけてある。客が自分で混ぜながら食べるんだ。スペインの｛黒飯」と違って、ねっとり感はない。うん、悪くない。
　せっかくだからと、ウエイトレスとＫ君を並べて写真に撮った。
“Can I take a picture of you? We are tourists.”
「写真を撮っていいかな？観光客なんだ」
　と言うと、「え？foto　フォト？」と訝（いぶか）しげな顔をしたが、カメラを向けるとにっこり笑って

くれた。

　ホテルに戻ると、フロントでマラガ行のバスを確認した。

“How often does the bus go to Málaga?

「マラガまでのバスは、たくさんあるの？」

“Every one hour”

「一時間ごとに出ていますよ」

　私は、ひと風呂浴びてホテルのバルへ出かけると、今日もビールで一日をしめた。

21日（日）　アルバイシン→マラガへ

　グラナダの地は、北東の丘陵から南に向かって平地が広がる。丘陵地帯には二つの丘があり、その間をダーロ川が流れている。アルハンブラ城は南の丘に建ち、北の丘の斜面に広がるアルバイシンの街並み見下ろすことができる。
　今日は、アルハンブラをアルバイシンの街から眺めてみよう。夕暮れ時にアルバイシンを訪れると、夕映えに赤く染まるアルハンブラの全景が目の前に浮かび上がり、その背後のはるか南に白雪を頂くシェラネバダの山々を望むことができる、とガイドブックには書いてある。しかし、今日の午後にはマラガへ向かう私たちは、残念ながら夕映えに染まるアルハンブラを見られない。

　城砦都市として造られたアルバイシンの石畳の路は、狭くて急で迷路のように入り組んでいる。私たちは、何度も道を訊ね確認しながら、両側に白壁の家が立ち並ぶ石畳を登っていった。
“Where is San Nicolas?”
「サン・ニコラスはどこですか？」
“Go straight.”
「まっすぐ行きなさい」
“It’s way down this street?”
「この道沿いにずっとですか？」
“No, not down. Always up.”
「いや、下るんじゃない。いつも、上りだよ」
　日本人とスペイン人が片言の英語でやりとりし、時には意味が食い違う。

　丘の中腹にはサン・ニコラス教会があって、そこに展望台がある。アルハンブラを眺める一番のビューポイントだ。私たちは、ベンチに腰をおろして、ダーロ峡谷の上にそびえ建つアルハンブラの全景を眺めた。あそこがナスル宮殿で、昨日は、あのあたりの窓からこちらを眺めた。カルロス5世の宮殿の屋上に人がいる。ヘネラリーフェはあの上だ。昨日私たちは、向こう側からこちらを眺めていた。つまり、こうして、ニコラス展望台の観光客とアルハンブラ宮殿の観光客が、毎日、お互いを見つめ合う。もちろん、互いの姿を識別できるほどの距離ではないが。

　1491年のグラナダ攻防戦で、アルバイシンの住民は、攻め入るカトリック軍を迎え撃ち激しく抵抗した。砲弾の轟音と銃声、甲冑に身を固めた騎馬兵が狭い石畳の路を駆けあがる。後に続く歩兵たち。喚声と悲鳴。阿鼻叫喚（あびきょうかん）。アルバイシンの絶望的な戦いの一部始終を、アルハンブラ宮殿の北の窓から見つめていた王族や貴族とその家族。彼らの思いは、いかなるものであったのか？

　1492年1月、最後のイスラム王国ナスル王朝は降伏し、アルハンブラ城を明け渡した。「無血

開城」である。すでに1487年8月19日、マラガは、徹底抗戦の末に攻略され、貴族住民ともに虐殺されたという。マラガを失い、アフリカにおけるイスラム諸国からの補給路は断たれた。
　ナスル朝は玉砕せずに降伏した。そして、グラナダに留まるイスラム教徒の信仰・習慣、財産を保障してもらう。そういう協定を交わしたのだ。その後、アルバイシンはアラビア人の居住区となった。しかし、協定が守られたのは、カトリック両王の孫のカルロス５世の代までで、その子フェリペ２世は、イスラム教徒を厳しく弾圧し、次のフェリペ３世は、1609年、アラビア人の追放令を発布したのである。

　「せっかくここまで来たんだから、もうひと踏ん張りして、サクラ・モンテまで行ってみようか？ここへ来ることはもう二度とないだろう」
「そんなことはないだろ？また来ようと思えば来られるさ」
「どうかな？もうすぐ70歳だよ」
　私たちは「サクラ・モンテ」を目ざして、さらに歩いた。ガイドブックによると「アルバイシン地区の北東にあるサクラ・モンテには、古くからロマ族と呼ばれるジプシーが、丘の斜面に洞窟住居をつくって住んでいる。洞窟住居は冬暖かく夏は涼しい。洞窟博物館もある、と書いてある。
　ようやくたどり着いた「洞窟博物館」の登り口には、看板が掛かっていた。
“It is open every day.”
「毎日やっています」
　しかし、登ってみると、「博物館」と名乗るには、しょぼい建物があって、閉まっていた。
「あれ？今日は閉館？それとも閉鎖かな？」
　せっかく登ってきたのにと愚痴を垂れながら坂道を降りていくと、女性二人の観光客が登ってくる。
“Hello! The museum is closed.”
「ハロー！博物館は閉まっているよ」
“Really? But the sign says it’s open every day.”
「うそー！毎日やっているって、看板に書いてあるよ」
“Yes, we saw the sign but it’s closed. I don’t know why.”
「うん、その看板は見たけれど、閉まっているんだ。理由はわからないけど」
　Thank you と言ったものの、二人は（でも、せっかくここまで来たんだから、念のため行ってみるわ）というような顔をして、さらに登っていった。
　帰路は、バス通りを歩いて下り、川沿いのオープン・カフェで一休みした。

　ホテルで荷物を受けとると、タクシーでバス・ステーションまで行った。マラガへはバスで移動する。グラナダ発12：50だ。
　バスが到着し、運転手が降りてきて、バスのボディの荷物入れの両側の扉を上に開いた。乗客は、てんでばらばらに自分のスーツケースなど荷物を乗せたり押し込んだりする。ああ、ダメ

だよ、手前にそんな大きな荷物を置いては。もう少し整然と、奥から並べられないのか？運転手は何しているんだ？
　運転手は、知らん顔してバス・ステーションのスタッフとお喋りをしている。手を貸す気配は全くない。（日本であれば）と、また愚痴をこぼしたくなる。

　バスは順調に走り、2時間弱でマラガのバス・ステーションに着いた。降りた私が荷物をとりに回ると、荷物置き場のバスのボディの扉を片方だけ開けて、腰をかがめた運転手が私を振り向いた。「どの荷物だ？」というようなそぶりを見せる。
（おっ？荷物取ってくれるのか？）
　と少しうれしくなったが、運転手は「急いでくれ、ここが終点じゃあないんだ」というようなことをわめいて、それから「お勝手の使い捨て手袋」をはめた手で、私の荷物を引きずり出した。ほんとに変な奴だ。バスはこのあと鉄道駅にまわるのかな？

　プリントアウトしたバウチャーに目を通したフロントのホテルマンは、流ちょうな日本語で「ようこそ、いらっしゃいました」と言い笑顔をみせた。
“Tell me the way to museo Picasso?”
「ピカソ美術館へ行く道を教えてください」
　ホテルマンは、市内地図を取り出してホテルの位置と「ピカソ美術館」をマーキングすると、さらにお勧めのレストランを紹介して印をしてくれた。なるほど現在３時少し前だから、スペインでは、ちょうど昼食時間だ。しかし、私たちの感覚で３時といえば、昼食時間はとっくに過ぎて腹ペコだ。部屋に入って、荷物を置き、セイフティ・ボックスをセットして貴重品を入れると、ホテルを出て、すぐ隣の鉄道駅へ行った。まずは、明日のマドリッド行の切符を確保しておかなければいけない。購入した切符は 15：55発、18：40 着だ。
　これでひと安心だ、昼飯にしよう。ホテルマンの紹介してくれたレストランなら間違いないだろうけれど、そこへ行くまで待てないな、駅舎内で食べよう。

　スペイン料理のカフェの外の席についたつもりだったが、中から出てきたウエイターは中国人だった。あれ？こちらの椅子は別のレストランなの？そういえば椅子の色が違う。ウエイターは、「ビュッフェ形式でドリンク付き、10ユーロだ」と言う。（ビュッフェ形式？まあいいか）と、中に入ってみると、並んでいるエビも貝もほとんど生だ。巻き寿司と鶏肉の炒め物、ハムと野菜を少しだけ取ってきたものの、不味(まず)い。
「不味いな、出ようか？」
「え？」とＫ君は少し驚いた様子だが、「そうだな」と同意してくれた。
私たちは、レストランを出た。それから別の店で昼食をすませたものの、駅舎の中のレストランはイマイチだった。

　まずは、「ピカソ美術館」へ行ってみよう。タクシーを降りると、私たちは、運転手の指さし

た方向に向かって歩いて行った。左手にカテドラルがあって、その手前を右に曲がるとピカソ美術館があった。驚いたことに、日曜休日だった。（日本であれば）と、また愚痴をこぼす。日本であれば、日曜は稼ぎ時で月曜休みなのに。
　じゃあ「アルカサバ（城砦）」へ行こう。このアルカサバは、古代ローマの要塞の跡に、11世紀、イスラム教徒のアラビア人によって築かれたものだ。入り口の左手には、古代ローマ時代の劇場の発掘と修復が行われている。規模は小さいが大変貴重な遺跡だそうだ。私たちは、高い城壁で遮られた石畳の路を登り、石造りの門をいくつも潜り抜けた。中には宮殿の一部と小規模なイスラム様式の庭園が残っていた。
「アルハンブラを見た後ではなあ」
「そうだな、すべてミニだな」
　アルカサバを出ると、私たちはヒブラルファロ城へ続く坂道をさらに上っていった。この城砦も、もちろんイスラム教徒のアラビア人によって造られたものだが、時期は14世紀だ。坂道がきつい。
「午前中はアルバイシンの坂道を上り、午後はまたこんな急な道を登るのか、よくやるよ」
「いやあ、体力も気力も、お互い大（たい）したものだ」
　と、私たちは、慰め合い、励まし合いながら頑張って歩く。
　途中、展望台があって、南を見下ろす。眼下には高層ビルが林立し、その手前には闘牛場の円いアリーナがある。ビル群の先は港で、クレーンや停泊する船が見える。そして、その先には地中海がどこまでも広がっている。鮮やかな海の青と空の青が、はるか水平線で接している。陽の光をキラキラ反射する青い地中海は、まことに穏やかである。
　たどり着いたヒブラルファロ城頂上の見張り台に二人は立つ。西を見下ろせば、カテドラルの尖塔の先にマラガの街が広がっている。この城と砦は、グラナダ陥落の４年半前、徹底抗戦の末、カトリック軍によって攻略された。そして、生き残った貴族・住民とも、その徹底抗戦に対する見せしめで虐殺されたという。
「帰ろうか？ちょっと疲れた」
「夕飯は、ホテルのレストランでいいか？今から探すのも面倒だな」

　私たちはタクシーを拾ってホテルに戻った。ところがホテルのレストランは営業していない。休日ではなく営業していないのだ。しかたがないので、ホテルを出た。交差点の向こうにオープン・カフェがある。椅子に腰かけ、食事はできるかと訊くと、ウエイトレスは店の中へ戻って確認した。パスタならできるという。ボロネーゼだそうだ。「じゃあ、それを二つとビール大とコーヒー」と注文した。
　信じられない。ビールの表面に薄く氷が浮いている。ボロネーゼは最悪だった。パスタは茹ですぎでぐったりしているし、ソースはきっとボロネーゼの缶詰を温めただけだろう。少し口にしてみたが、とても食べる気にはなれなかった。
「ひどいな、このパスタ。出ようか？」
「え？そうだな、確かに不味い」

“Check, Please!”「お勘定」
　と、ウエイトレスに合図した。ウエイトレスは、ほとんど手をつけていない私たちの皿を見ると困惑した表情を浮かべた。
“Oh, you don’t like it?”
「あら、おいしくないの？」
　何と答えていいのか戸惑っていると、彼女は笑顔をつくって「謝謝（しぇしぇ）」と言った。私たちは、なぜか中国人に間違えられたようだ。結局、駅舎内の「スタバ」でハモンのサンドイッチを食べて夕飯とした。固くておいしくない。今日は、食事に関して、全くついていなかった。

22日（月）民族博物館　ピカソの生家→マドリッドへ

　朝食をしっかり食べてから出かけた。今日も空は青い。さて、今日は、「市場」、「民族博物館」、「ピカソ美術館」、「ピカソの生家」の四つを歩いて回る。
　地図を見て大雑把に確認する。ホテルを出て北東に進み、グアダル・メディナ川に到達したら北に向かって少し歩く。川から少し東に入ると「市場」がある。市場をのぞいたら、川沿いの道路に戻って、北へ進めば道の右手に「民族博物館」がある。それから、右に曲がって東へ進む。カテドラルへ行きついたら、「ピカソ美術館」と「ピカソの生家」へまわる。昼食は昨日、ホテルマンから勧められた「Pimpi」というレストランだ。地図を見るかぎり、問題ない。

　なんたって地中海の国際的リゾート、マラガの市場だ。マドリッドの市場よりはそうとう期待できそうだ。ところが、覗いてみてがっかり。全く普通の市場で、さほど大きくもなければ、観光客用でもない。大人気の観光スポットとなっている日本の築地とは全然違う。拍子抜けした私たちは、川沿いの道を北上した。
　おかしいなあ、「民族博物館」はそろそろこの辺りの道沿いにあるはずなんだが。場所を訊ねてそのあたりへ行っても、見当たらない。セビージャの「フラメンコ博物館」を探し回った時と同じ状況だ。後で判明したことだが、入り口が川沿い側ではなかった上、さほど大きい建物ではなく普通の民家のようだったから、行ったり来たり、二度ほどそこを通り過ぎていたのに見落とした。「博物館」という自分のイメージにとらわれて過ぎていたのだ。
　博物館は17世紀の旅籠を改装したものだそうだ。台所、書斎、葡萄酒づくりの道具一式、バルのテーブルやワインの樽、グラスや金製のジョッキ、イワシ漁の船や網、荷馬車、鞍などなど。骨董品を趣味にする人なら大いに喜びそうな「博物館」だ。

　「ピカソ美術館」は観光客でにぎわっていた。それにしても、ピカソの絵や彫刻は、絵画に対する従来の感覚というか「ものさし」で眺めるとチンプンカンプンで困惑する。伝統的な絵画の手法の「遠近法」や「肉付け法」を否定し、対象を多角的に解体し、細分化して再構成する「キュービズム」、などと説明されると、なるほどそういうことなのか？とは思うけれど、やっぱりチンプンカンプンだ。
　1881年にピカソが生まれ、１歳半まで住んでいた家を改修して美術館にしたのが「ピカソの生家」だ。いくつかのデッサンが展示してある。Ｋ君は、「ピカソ美術館」よりこちらの展示のほうがいい、と感想をもらした。

　昼食は、ホテルで勧められたレストランPimpiでとる。中は禁煙だから、外のテーブルについた。まずは、ワイングラスに入ったガスパチョ（Gazpacho）で乾杯する。青空の下、乾いた空気の中を歩き回った後の冷たいガスパチョは格別だ。ガスパチョは、トマトベースで酸味の効いた野菜スープを冷やしたもので、スペインの名物だ。それから、私は、仔牛のカツレツとタコのフライ、それにビールの大を注文した。Ｋ君は、ミックスサラダにローストチキンで飲み物は水。

ウエイターがナイフやフォークと一緒に、小さなバスケットに入れたパンを持ってくる。やっぱり、パンがついているんだ。ビールのつまみのオリーブの実は、ナイフで切込みが入れてあって、なるほどこれだと、種をすっととり出せる。
「うまい。K君、これはうまいよ」
「ほんとだ。このオリーブは、今までで一番うまい」
　仔牛のカツレツとタコのフライが運ばれてきた。かりっと揚がった仔牛の肉は香ばしくおいしい。タコは、10センチほどの太目の足に刻んだハーブをまぶしてフライにしてある。緑で透明なオリーブオイルがたっぷりとかかっている。食感はサクではなく、オイルのせいか、しっとりとやわらかい。まあ、悪くはない。
“Where’s the bathroom?”
「トイレはどこですか？」
“Go inside and turn left.”
「中に入って左です」
　昼下がりの日射しの下からレストランの内部に入ると、冷んやりとして気持ちがいい。テーブルが並べられたレストランの向こうには、小さなパティオ（中庭）があって、その先はバルだ。長いカウンターの中に立つバーテンダーの後ろには、ワインの樽が並んでいる。樽の下のほうには栓がついていて、注文すれば樽から直接グラスに注いで客に出すのだ。

　スペインの新幹線 AVE がマドリッドのアトーチャ駅に到着したのは18時40分だった。私たちはラファエル・ホテル・アトーチャまで歩いた。明朝、マドリッド空港から日本に飛び発つため、最初の２泊と同じホテルに最終日も１泊するのだ。
　10時まで明るいのだ。最終日は、「ソフィア王妃芸術センター」へ行ってピカソの『ゲルニカ』を見よう。ガイドブックによれば、開館は 10：00～21：00 で、最終は、閉館 30 分前には入館するようにとある。場所はアトーチャ駅の隣だから歩いて行ける。
　チェックインして部屋に入ると、セイフティ・ボックスを設定しようとした。ところが作動しない、（またか）。フロントに電話をしたが、修理工はなかなかやって来ない。じりじりして待つがまだ来ない。もうすぐ８時だ。
「時間がない。貴重品はスーツケースに入れて鍵をかければいい。出かけよう」
「そうするか」
　と、そのとき部屋がノックされた。やってきた修理工は、設定の手順を数回繰り返しカチャカチャやってから、首を傾げた。そして、中のケースを抜くと電池を取り出して、 ”5 minutes” と言い残し出ていった。10分ほど経ったか、戻ってきた修理工は電池を交換してから設定してみて ”OK” と笑顔を見せた。
（電池切れかよ）
　私たちは貴重品を入れるとホテルを飛び出した。
「遅くなった。タクシーで行こう」
　と、ホテルにスタンバイするタクシーに乗り込んだ。行先を告げると運転手は「ええー？」と

信じられないという顔をする。
“It’s close from here?”
「ここから近いの？」
“Very close. Very close”
「とっても近い。とっても」
　と、「全く参ったな」という表情でクルマをスタートさせた。
“We are in a hurry, sorry!”
「ごめんね、急いでいるんだ」
　と謝ると， ”All right”「いいよ」と苦笑いする。
　私は、ポケットから財布を取り出し、溜まったコインを手のひらに乗せると２ユーロと１ユーロを拾いだした。近距離で申し訳ないからチップもあげなきゃあ。
　クルマが「ソフィア王妃芸術センター」の手前の赤信号で止まった。”OK, here”「ここでいいよ」私は数枚のコインを渡すと、信号が青になる前にと、Ｋ君に続いてクルマから降りた。私たちは、クルマの前の横断歩道を渡って「芸術センター」にむかった。信号が変わって、クルマがスタートする。
　しばらくして、私は車のシートに財布を置いたままだったことに気がついた。
「しまった。クルマの中に財布を置いてきた」
「え？・・・どうする？戻ったほうがいいんじゃないか？」
「いや、まあいいよ。大して入ってないから」
「大丈夫か？」
　立ち止った私たちは再び歩き出した。
「あ、まずい! クレジットカードが入っている」
「え？ほんとか、やっぱり戻ろう」

　私は、クレジットカードなんて普段持ち歩かない。海外旅行にも持っていかない。しかし、今回は、アルハンブラのチケット引き換えの際必要だから、財布に入れた。アルハンブラから帰った時、取り出しておけばよかったものを、ついついそのままにしておいたんだ。
　私は、ホテルまで急いだ。まあ、次の客はシートの上の財布に気づいて運転手に告げるだろう。運転手はホテルに届けるはずだ。タクシーを使うような人に、置き忘れた他人の財布を黙って持っていくような人はいないだろう。
　ホテルに着くとフロントでスタッフに訊いた。
“I’ve left my wallet in the taxi. Did the driver report it?”
「財布をタクシーに置き忘れました。運転手が届けてないですか？」
“No, no one reported. Do you have the receipt or do you remember the driver’s name or the registered number?”
「いいえ、誰も届けていませんよ。レシートを持っていますか？それとも、運転手の名前か登録番号を覚えていますか？」

“I don’t have the receipt and I don’t remember the driver’s name. Then,…Could you call the taxi company weather the driver reported it?”
「レシートなんて持っていない。運転手の名前も憶えていない。じゃあ、運転手が届けているかどうか、タクシー会社に電話していただけませんか？」
“There are so many taxi companies in Madrid. We can’t do it”
「それは無理です。マドリッドには、タクシー会社はいっぱいあるのです」
“There is my credit card in it.”
「クレジットカードが入っているんです」
“How about your passport?”
「パスポートは？」
“There isn’t the passport in it.”
「パスポートは入っていません」
　私は部屋に戻って、カード会社に電話してカードを止めてもらおうとした。「カードを紛失したときの緊急連絡番号」が手帳に書き写してある。
（あれ？おかしいぞ、電話が通じない）
　何度やってもダメだ。私は、フロントに行った。
“I tried to make an international call in my room but I couldn’t.”
「部屋から国際電話をかけようとしたけれど、できないんです」
“Show me the number.”
「電話番号は？」
“0120ー”
“Put 0 off.”
「０を取るのですよ」
“This is free dial number.”
「これはフリーダイアルの番号なんです」
“You can’t use free dial number on an international call.”
「フリーダイアルで国際電話はできませんよ」
“Then, could you call the police station? Someone might report it.”
「じゃあ、警察署に電話していただけませんか？誰かが届けているかもしれない」
“The police station won’t be open until 8:30 tomorrow morning.”
「警察署は、明日の朝８時半まで受け付けてくれません」
（え？うそ。当直っていないの？）
　しかし、まあ、警察署に届いているなら、今夜でも明日でも同じことか。いや、８時半じゃあ、飛行機に間に合わない。
“I’m going back to Japan tomorrow morning. The departure time is at 10:15. If I go to the police station at 8:30, I’ll miss my flight.”
「明日の朝、日本に帰るんです。出発時刻は10時15分です。8時半に警察署へ行けば、乗り遅れて

しまう」
“You can report it at the airport police office.”
「それでしたら、空港の警察詰所に届けることができますよ」

　私は、あきらめた。私たちが降りた後、タクシーに乗り込んだ客が、座席の財布を見つけ（お？ラッキー）と中の札を抜き取ったとしても、クレジットカードを不正に使用するのは、そんなに簡単なことではない。暗証番号を知らなければキャッシングはできない。ショッピングはサインでＯＫだが、漢字で書いた私のサインを、店員の見ている前で、うまく似せて書けるだろうか。それに、なによりも、見つけた現金を（ラッキー）といただいてしまう行為と、自分を偽って、カードを不正に使用する行為との間には、そう簡単には飛び越えられない大きなギャップがあると思う。
　Ｋ君も、過去のデータからしても、カードの不正使用の可能性のパーセントはかなり低いと言う。現金を抜き取ったあと、財布はカードごと川とかゴミ箱とか、わかりにくいところに捨てる可能性が高い、と慰めてくれた。まあ、最悪、ショッピングで使用されたとしても、昨夜から私が帰国してカード会社に連絡するまでの２日間で、「上限90万円」を使い切るのは難しいだろう。

夕飯はホテルのレストランで済ませた。私はＫ君に謝った。
「せっかくの旅行が、最後の最後で、いやな思いをさせて悪かったな」
「いや、オレの方は気にしないでいいよ。やっぱりさ、時間に追われて何かすると、誰でもポカやるものだよ」
「何度も海外旅行したけど、こんなのは初めてだよ」
「内田は、ほら、気を使う方だから。タクシーの運転手に申し訳ないとか、あれこれ気を回していたんじゃないのか？」
「まあ、財布の中の現金だけで済めばいいけど」
「過去のデータからしても、カードが使用される確率は、かなり低いと思うよ」
　注文したcuttlefish（コウイカ）のバジル炒めはおいしくなかった。私は、パンをちぎって口に運ぶとビールのお代りをした。

K 君

筆者　隣に座る男性はピカソ

23日（火）マドリッド空港警察→帰国

　チェックアウトするとホテルにスタンバイするタクシーに乗り込んだ。
“To airport, please.”
「エアーポート、空港までお願いします」
“Aeropuerto?”
「アエロプエルトですか？」
（え？英語ダメか？）
　タクシーの運転手の間で、（昨日、ホテル・アトーチャで乗せた客が財布を置き忘れてね）などというハナシがなかったかどうか、念のため訊いてみようと私は考えていた。それなのに英語はダメか？

　発車後しばらくしてから、それでもまずは英語で話しかけてみた。しかし、やっぱり通じない。私は、スペイン語のフレーズを記憶の中から手繰り寄せながら、運転手に話しかけた。
“Anoche, He perdido mi cartera en taxi.”
（アノチェ、エ、ペルディード、ミ、カルテラ、エン、タクシ）
「昨晩、財布をタクシーに置き忘れたました」
　応える運転手のスペイン語は全く分からない。
“No comprendo. Hablo español un poco.”
（ノ、コンプレンド、アブロ、エスパニョール、ウンポコ）
「わかりません。スペイン語は少し話すだけです」）

　信号待ちで止まると運転手は、グローブボックスを開けて手帳を取り出し、ページをめくる。信号が青になってクルマを発車させる。次の次の信号で止まると、今度はメモ用紙とペンを取り出し、渋滞の中をノロノロ運転しながら、何やら書きつけている。それから後ろを振り向くと、メモ用紙を私に渡して何か言う。メモ用紙には番号が書きつけてある。
“Teléfono?”（テレフォノ？「電話か？」）
　と訊くと「そうだ」と言う。”Gracias!” と礼を言うものの、電話じゃムリだろうなと気が重くなる。

　市街地を抜けて、しばらくは順調に走っていたが、突然、渋滞に巻き込まれて、まるで身動きが取れない。こんな調子で、警察に届ける時間はとれるのかな？いや、フライトの搭乗時間にさえ間に合うのかどうか？前方にぎっしりと混み合いへし合いするクルマの大群を目にして、私はとても不安になった。
“Muchos coches?”
（ムチョス、コチェス？「クルマが多いね？」）
“Hora punta”

（オラ、プンタ　「ラッシュアワーだ」）
　前方に合流地点が見えてきた。私たちの片側2車線の道路の右側からもう一本の道路がこちらに向かってきて、ほとんど同じ地点で大通りに合流する。運転手は、何も言わず冷静に、じりじりと左右の運転手と競り合い譲り合いながらクルマを前へ進める。尻込みしていたら、一歩も前に進めない。勇気とテクニックが必要だ。難所を切り抜け大通りに出ると、急に流れがよくなった。クルマはどんどん加速し、時速 100キロを優に超えている。怖い、怖いけれど、どうしようもない。窓の上の把手にしがみつき、無事着いてくれることを祈るばかりだ。
　タクシーは空港に駆け込むと専用の乗降場で止まった。料金は30ユーロだ。親切だったし、頑張って運転してくれたから、チップ10ユーロあげようと思った。しかし、ポケットを探ると、あいにくなことに50ユーロ札と20ユーロ札しかない。しかたがないので、50ユーロ札を渡して叫んだ。
“Cuarenta OK?”
（クワレンタ、OK？「40、OK？」）
　運転手は OK と言って10ユーロ札のお釣りをくれた。

　チェックイン・カウンターでスーツケースを預けると、私は、K君に告げた。
「この奥に警察詰所があるから行くけれど、どうする？」
「じゃあ、この店で土産(みやげ)物を見ているよ」

　私は、奥にある警察詰所の受付カウンターに歩み寄って声をかけた。
“Excuse me, I lost my wallet in a taxi yesterday evening. I’d like to report it.”
「すみません、昨日の夕方、タクシーで財布を無くしたんです。届け出をしたいのですが」
　顔を上げた若い警官は、ちょっと待てと言って部屋の中へ入って行った。しばらくしてから出てくると、”This way”「こちらへ」と私を中に招き入れ、長椅子を指さした。”Wait here.”「ここで待て」と告げた。
　腕時計を見ると、フライトの搭乗時間の9 時 30 分を、すでに過ぎている。やがて奥から上司らしき警官が現れた。私は訊いた。
“Did anyone report to have found my wallet in a taxi?”
「タクシーで財布を見つけたという届け出はありませんでしたか？」
“Nobody did. How about your passport?”
「ありません。パスポートは？」
“There wasn’t my passport but credit card in it.”
「パスポートは入っていません。だけど、クレジットカードが入っているのです」
“It might be difficult to find it. Hum… what time is the departure?”
「見つけるのは難しいかもしれませんね。で、出発時刻は？」

　届けても無駄だよ、悪いけど。パスポートを紛失していないのなら、まあいいじゃないか。そ

れより、飛行機に乗り遅れたら大変だよ、と言いたげだ。その通りかもしれない。
“Ok, I give up.”
「わかったよ。あきらめるよ」
“Sorry”
「お気の毒ですが」

　私は急いで、土産物売り場に向かった。しかし、Ｋ君は見当たらない。おかしいなと思いながら、あたりを探したが見当たらない。
（えーぇ？）
　次第に焦る。10時をまわった。どうしよう？もう限界だな。しかし、今、手荷物検査を通過して出国審査を通れば、もう戻れない。
（どうしよう？）
　しかたがない、搭乗ゲートまで行ってみよう。搭乗時間がとっくに過ぎて、心配になったＫ君は、搭乗ゲートで待っているのかもしれない。ボーディング・パスを見るとゲートはＪ４３だ。私は走った。ゲートには女性スタッフが二人いる。息せき切って駆け込んだ私は、ボーディング・パスを渡して告げた。
“I lost my friend.”
「友人を見失った」
“What’s the name?”
「名前は？」
　私が、名前を告げると、スタッフは緊張した面持ちで画面をチェックした。それから、振り向いて私に確認する。
”Mr?”「男性の方ですか？」
　私が”Yes”と、うなずくとスタッフは「ふぅ」と一息ついた。
“He is on board.”
「もう、乗っています」
（ふう）
　急に力が抜けた。こんなにも安堵した気持ちになったことは、いまだかってない。いや、それはちょっと言いすぎか、少なくとも最近はない。
　機内に入り、私は通路をゆっくり進んだ。やがて、２列に並ぶ窓側の座席の列の向こうで、上体を伸ばして不安げに通路を見ているＫ君が、私を識別すると、にっこり笑い手を挙げた。

　追記；帰国後確認すると、カードの不正使用はなかった。

スペイン旅行記　¡Buen Viaje！ Dos personas!

http://p.booklog.jp/book/99900

著者：内田芳邦
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bon1582/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/99900

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/99900

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ